

秋田県文化財調査報告書第368集

常野遺跡

—主要地方道本荘西仙北角館線緊急地方道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004・1

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂(しろざか)遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晚期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

常野遺跡

—主要地方道本荘西仙北角館線緊急地方道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004・1

秋田県教育委員会



1 SKT19陥し穴断面精査作業状況(南→)



2 SKT25陥し穴完掘(真上→)

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、主要地方道をはじめとする地方道路網の整備・拡充は、人々の暮らしを支え、地域社会の経済・産業活動を支援する開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、主要地方道本荘西仙北角館線緊急地方道路整備工事に先立って、平成14年度に西仙北町において実施した常野遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、縄文時代前期の陥し穴が検出され、縄文時代に狩猟場として利用されていたことが分かりました。また古代の遺構・遺物も検出されたことから、縄文時代と古代の2時期にわたって人々の生活の場となっていたことが明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県仙北地域振興局建設部企画道路課、西仙北町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成16年1月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺清

例　　言

- 1 本書は、主要地方道本荘西仙北角館線緊急地方道路整備事業に伴い、平成14(2002)年度に発掘調査した西仙北町常野遺跡の発掘調査報告書である。調査の内容については、すでにその一部を埋蔵文化財センターワーク等によって公表してきたが、本報告書の記載内容を正式なものとする。
- 2 本書に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1『刈和野』『大曲』及び秋田県仙北建設事務所提供の5百分の1地形図である。
- 3 遺跡基本層位と遺構土層中の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』1994年版によった。
- 4 本報告書作成にあたり、以下の業者に作業を委託した。
　　自然科学的分析・・・株式会社パレオ・ラボ　　空中写真撮影・・・株式会社ハイマー・テック
- 5 本報告書作成の草稿執筆等は、下記のように分担した。

第1章　はじめに	・・・・・・・・・・・・・・・・	横山香菜子
第2章　遺跡の環境	・・・・・・・・・・・・	小西秀平、横山香菜子
第3章　発掘調査の概要	・・・・・・・・	田村瑞保、横山香菜子
第4章　調査の記録	・・・・・・・・	鈴木　茂、田村瑞保、横山香菜子
第6章　まとめ	・・・・・・・・	鈴木　茂、横山香菜子
各種図面の作成	・・・・・・・・	田村瑞保、横山香菜子
遺物写真の撮影	・・・・・・・・	横山香菜子
- 6 本報告書の編集は、鈴木と横山が行った。

凡　　例

- 1 遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号、検出順に通し番号を付した。精査の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

S K ・・・ 土坑	S K T ・・・ 陥し穴	S N ・・・ 焼土遺構
S D ・・・ 溝跡	S K P ・・・ 柱穴様ピット	
- 2 遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構土層には算用数字を使用した。
- 3 挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず土器・石器・鉄製品ごとに通し番号を付し、写真図版中の番号と対応する。石器の番号にはSを、鉄製品にはMを付した。なお、挿図中の「1(7-3)」等の記載は、遺物1が写真図版7-3に図示されていることを示す。
- 4 遺構図中、「●」は土器の出土位置を示す。
- 5 挿図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。

(遺構)		焼土
(遺物)		凹み

目 次

序

例言

凡例

目次

表・挿図・図版目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第2章 遺跡の環境	2
第1節 遺跡の位置と立地	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 発掘調査の概要	9
第1節 遺跡の概観	9
第2節 調査の方法	10
第3節 調査の経過	11
第4章 調査の記録	15
第1節 検出遺構と出土遺物	15
1 縄文時代	15
2 古代	24
第2節 遺構外出土遺物	26
1 土器・土製品	26
2 石器	27
第5章 自然科学的分析	33
第1節 出土炭化材の年代と樹種	33
第6章 まとめ	37
図版	
報告書抄録	

挿図・表・図版目次

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 地形区分図	3
第3図 常野遺跡と周辺遺跡位置図	5
第4図 遺跡基本層位	9
第5図 グリッド配置図	10
第6図 検出遺構全体図	13・14
第7図 S K37・53・55・56・76土坑、出土遺物	16
第8図 S K110・204土坑、S K T01・02陥し穴	18
第9図 S K T19・25・84・97陥し穴、出土遺物	20
第10図 S N15・81焼土遺構、S D03溝跡、出土遺物	25
第11図 遺構外出土土器・土製品（1）	28
第12図 遺構外出土土器・土製品（2）	29
第13図 遺構外出土石器（1）	30
第14図 遺構外出土石器（2）	31
第15図 遺構外出土石器（3）	32
第16図 秋田県内陥し穴検出遺跡分布図	40

表目次

第1表 常野遺跡周辺の遺跡一覧表	6
第2表 柱穴様ピット観察表（1）	21
第3表 柱穴様ピット観察表（2）	22
第4表 柱穴様ピット観察表（3）	23
第5表 遺構外出土石器観察表	32
第6表 放射性炭素年代測定および同定結果	34
第7表 秋田県内陥し穴検出遺跡一覧表（1）	38
第8表 秋田県内陥し穴検出遺跡一覧表（2）	39

巻頭図版目次

- 巻頭図版 1 1 S K T19陥し穴暗面精査作業状況（南→）
2 S K T25陥し穴完掘（真上→）

図版目次

- 図版 1 調査区全景（東→）
図版 2 S K37・53・55・56・110・204土坑完掘、S K P49・50・70・111柱穴様ピット完掘、S K76土坑断面・土器出土状況
図版 3 S K T01・02・25陥し穴断面・完掘、S K T19陥し穴確認状況・断面
図版 4 S K T84・97陥し穴断面・完掘、S N15焼土遺構完掘、S N81焼土遺構遺物出土状況、S D03溝跡完掘、小学生による遺跡見学
図版 5 遺構内出土土器・石器、遺構内外出土土師器・須恵器・土錘・鉄滓
図版 6 遺構外出土土器（1）（2）
図版 7 遺構外出土土器（3）、S K76土坑埋土中出土土器胴部・底部、M E46・MO37グリッド出土土器
図版 8 遺構外出土土製品、遺構外出土石器（1）
図版 9 遺構外出土石器（2）（3）
図版10 炭化材樹種顕微鏡写真

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

主要地方道本荘西仙北角館線は、国道7号を起点とし国道46号に至る幹線道路である。同路線は、本県の沿岸部と内陸部とを結ぶ1ルートとして重要な役割を果たすとともに、通勤・通学道路及びバス路線として地域社会に根差した存在となっている。一方で、大型車のすれ違い及び冬期交通の確保が困難な隘路となっていることが指摘されてきた。県ではこれら諸問題の解決を図るために、同路線の改築事業を平成13（2001）年度から着手した。西仙北町では、平成12（2000）年に「西仙北ぬく森温泉ユメリア」がオープンし、平成14（2002）年には秋田自動車道西仙北ICが開設されている。周辺市町村からのアクセス向上・観光振興が期待される中で同事業が果たす役割も大きいと考えられる。

改築工事区域には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県仙北建設事務所（現：秋田県仙北地域振興局建設部）より秋田県教育委員会に調査の依頼があった。秋田県教育委員会では、平成12（2000）年9月に工事対象区域内のうち西仙北町野田から西仙北町四ッ谷までの1.55kmについて踏査及び試掘による分布調査を実施し、事業地内（西仙北町寺館字常野）で周知の遺跡1箇所を確認した。平成13（2001）年11月には、3,200m²を対象に常野遺跡の確認調査を行い、遺跡の一部が工事対象区域に及んでいることを確認し、協議の結果、事業計画との関連から平成14（2002）年度に発掘調査を実施するに至った。

第2節 調査要項

遺 跡 名 常野遺跡（じょうのいせき）（遺跡略号7JN）

遺 跡 所 在 地 秋田県仙北郡西仙北町寺館字常野20番地外

調 査 期 間 平成14年8月19日～10月16日

調 査 面 積 2,315m²

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 鈴木 茂（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 学芸主事）

田村 瑞保（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 非常勤職員）

横山香菜子（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 非常勤職員）

総 务 担 当 者 佐藤 悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課 課長）

高橋 修（秋田県埋蔵文化財センター総務課 主任）

（担当者・職名は調査時のものである。）

調査協力機関 秋田県仙北地域振興局建設部 西仙北町教育委員会

参考文献

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第324集 2001（平成13）年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第342集 2002（平成14）年

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

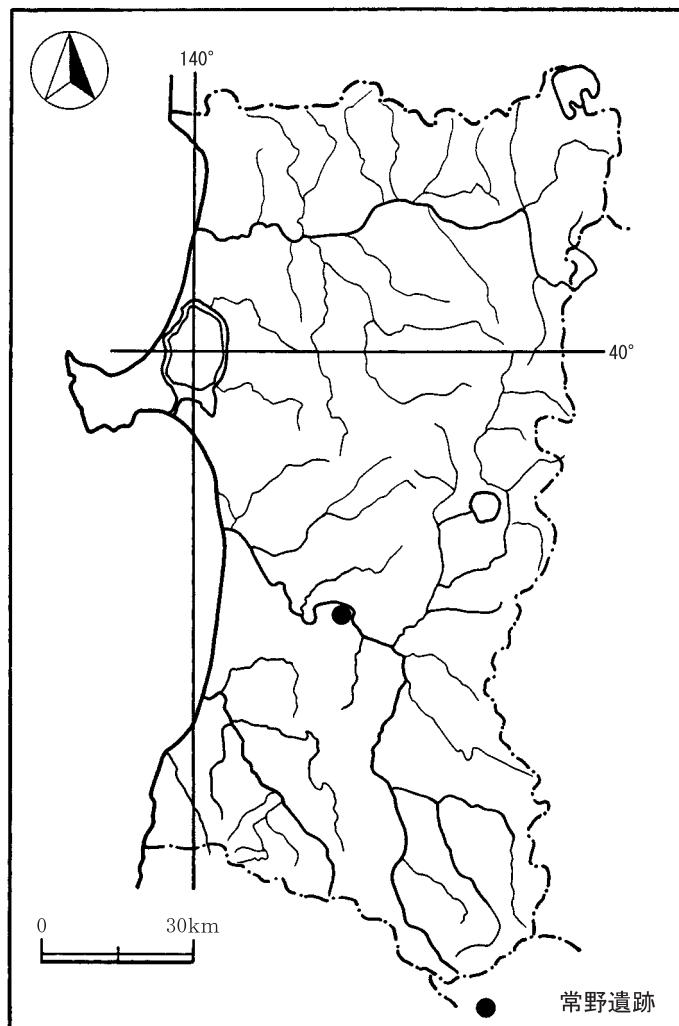
常野遺跡のある西仙北町は、秋田県のほぼ中央部、仙北郡西部にある町である。同町は、人口約11,000人を有し、毎年2月に開催される「大綱引き」の開催地として広く知られている。北側は協和町に、東側は角館町・中仙町に、西側は雄和町に、南側は神岡町・南外村に接し、総面積は167.02km²に及ぶ。町域のほぼ中央部を南北に雄物川が流れ、その東側は雄物川支流の土買川や今泉川に沿って開けた耕地が広がり、西側は雄物川の形成した氾濫原低湿地と出羽山地に囲まれている。雄物川は町の西部で大きく蛇行しており、これが協和町、雄和町との境界をなしている。刈和野地区には、国道13号線（旧羽州街道）とJR奥羽本線が並行して走っており、この地域の交通の主要動脈としての役割を果たしている。平成13（2001）年10月の刈和野バイパスの全線開通、平成14（2002）年4月の「西仙北インターチェンジぬく森プラザ」の開設で、周辺市町村とのよりスムーズなアクセスが可能となり、当町の広域交流圈形成の拠点としての発展が期待される。

常野遺跡は、JR奥羽本線刈和野駅から西に3.8kmの西仙北町寺館字常野20（北緯39度32分41秒、東経140度20分57秒）に所在する（第1図）。

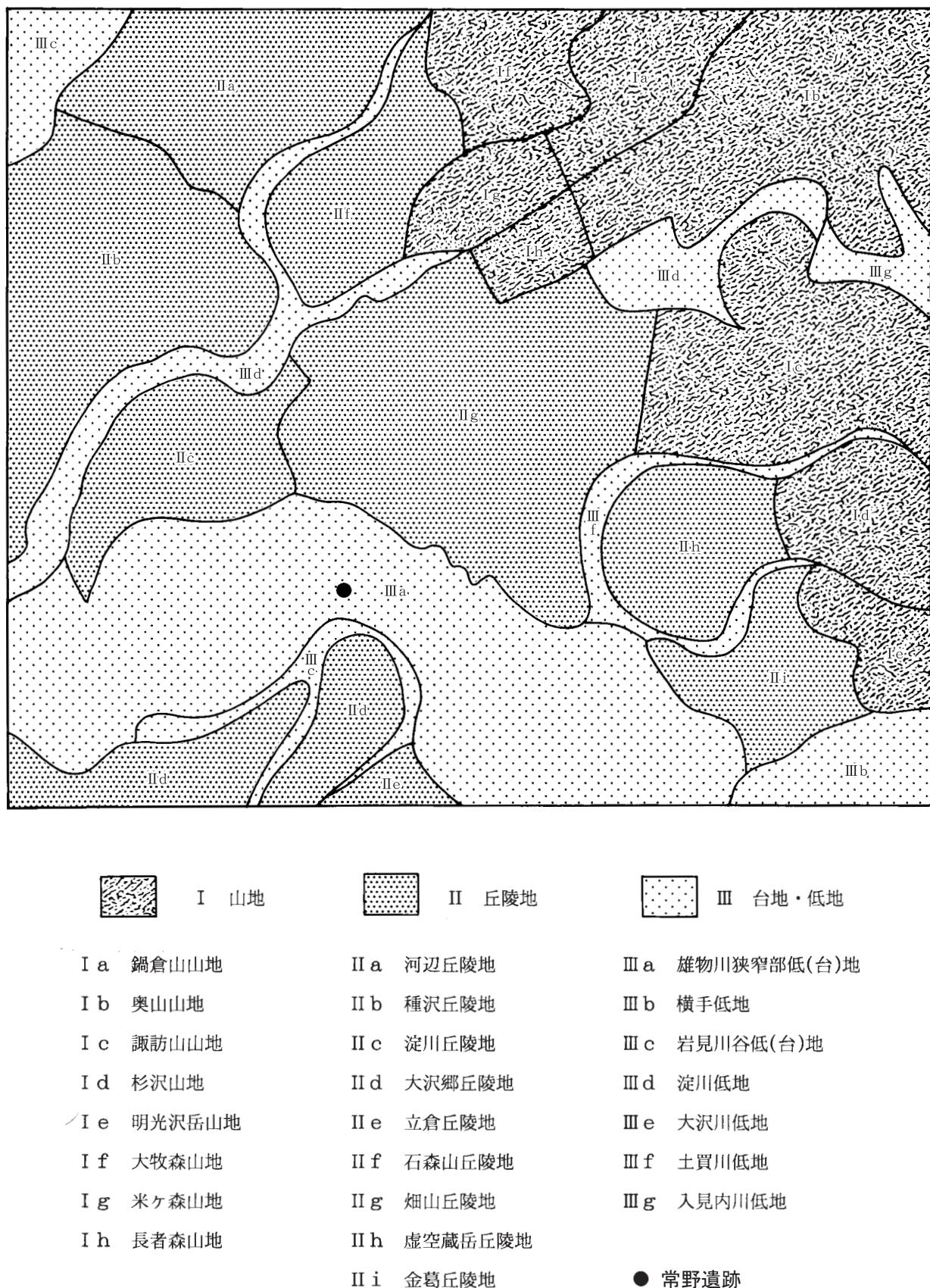
遺跡は、雄物川左岸の標高20～21mの河岸段丘上に立地しており、雄物川による砂礫や泥が堆積してきた地形上（雄物川狭窄部低地：III a）にある。遺跡周辺の地形は、段丘地、丘陵地、低地の3つから形成され（第2図）、淀川丘陵地（II c）・畠山丘陵地（II g）と大沢郷丘陵地（II d）・立倉丘陵地（II e）に挟まれるように雄物川狭窄部低地（III a）が川の流れに沿って伸びている。

第2節 歴史的環境

常野遺跡（46-16）は、縄文時代（前・中・後期）の周知の遺跡である。『秋田県遺跡地図（県南版）』によると、西仙北町内では、縄文時代から近世までの遺跡が53箇所（常野遺跡を含む）で確認されてい



第1図 遺跡位置図



第2図 地形区分図

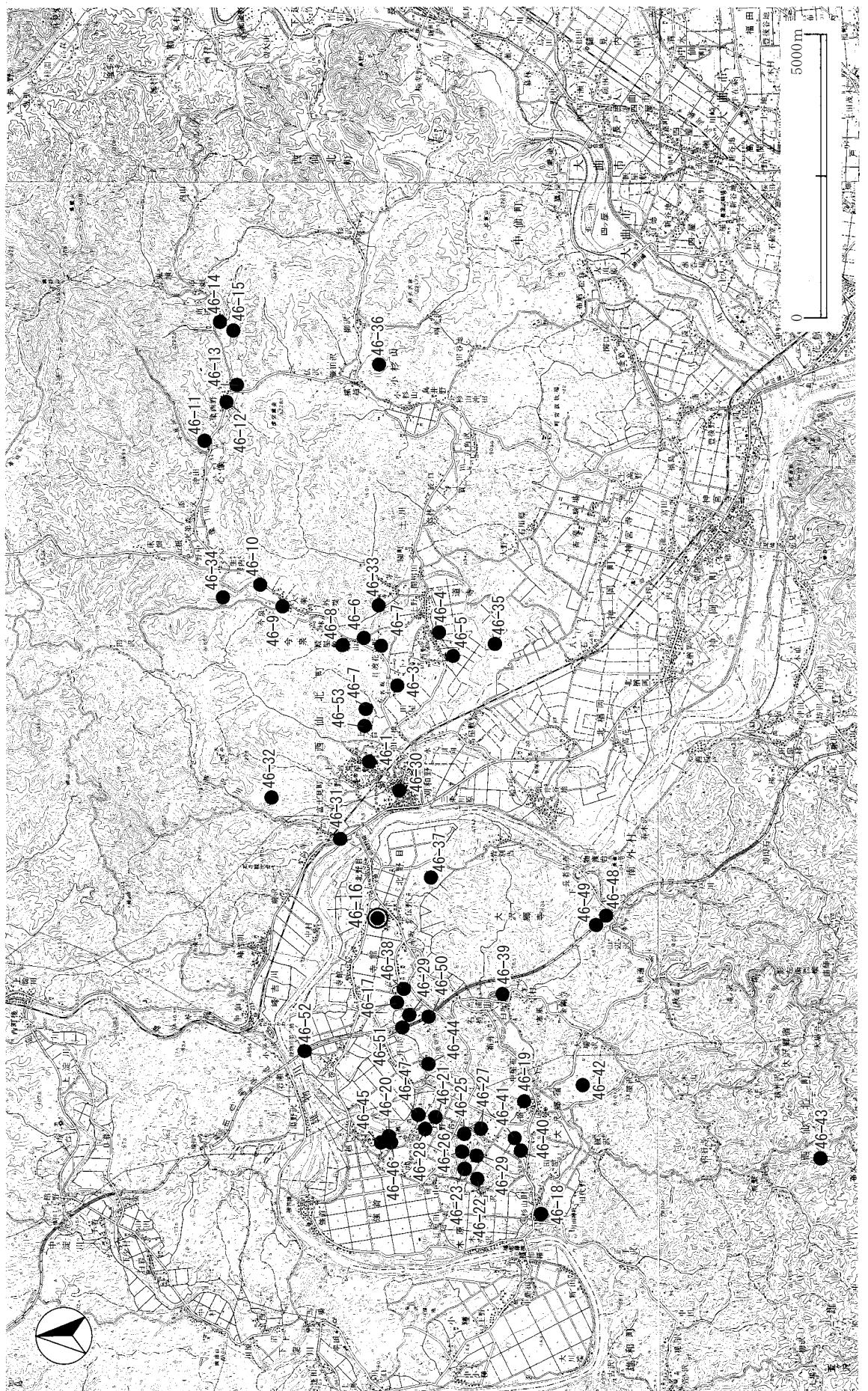
るが、本節では遺跡の周辺に位置し、発掘調査された遺跡を中心に歴史的な環境を概観する。縄文時代の遺跡として、前期から晩期まで計24遺跡が確認されている。前期の刈布沢遺跡（46-7）・常野遺跡（46-16）・戸川堤沢遺跡（46-48）・上ノ台XII遺跡（46-50）・寺沢遺跡（46-51）、中期の金精野遺跡（46-6）・刈布沢遺跡・常野遺跡・上ノ台II遺跡（46-21）・上ノ台VII遺跡（46-26）・上ノ台XII遺跡・笛原台遺跡（46-53）、後期の柏台遺跡（46-29）・常野遺跡・上ノ台XII遺跡・寺沢遺跡・笛原台遺跡、晩期の四階沢遺跡（46-2）・一ト鶴台遺跡（46-3）・上雨堤I遺跡（46-4）・上雨堤II遺跡（46-5）・殿屋敷遺跡（46-8）・寺村遺跡（46-13）・高城遺跡（46-17）・杉山田遺跡（46-18）・角間沢遺跡（46-19）・上ノ台II遺跡・寺沢遺跡、時期不詳の上ノ台遺跡（46-1）・大楽I遺跡（46-9）・小又口遺跡（46-11）・市道遺跡（46-14）・上ノ台III遺跡（46-22）・上ノ台IV遺跡（46-23）・上ノ台V遺跡（46-24）・上ノ台VIII遺跡（46-27）・上ノ台IX遺跡（46-28）・戸川堤沢II遺跡（46-49）・大巻遺跡（46-52）がある。これらのうち発掘調査が行われたのは、刈布沢・上ノ台XII・寺沢・笛原台・柏台・上雨堤II・常野の7遺跡である。刈布沢遺跡は、西仙北町教育委員会が昭和53(1978)年に発掘調査し、縄文前期の大木式土器が多量に出土した。上ノ台XII遺跡は、秋田県教育委員会が昭和62(1987)年に、西仙北町教育委員会が平成12(2000)年にそれぞれ発掘調査した。^(注1) この2回の調査では、縄文時代前期～後期の土器片が出土し、縄文時代中期の竪穴住居跡や土坑、縄文時代後期の墓が検出されている。なお昭和62年の調査では、本遺跡が断続的ながら、中・近世まで人々の生活の舞台となっていたことが確認されている。寺沢遺跡は、秋田県教育委員会が昭和62(1987)年に発掘調査し、縄文時代前期～晩期と平安時代中期の複合遺跡であることが確認され、土器片、石器類が出土した。笛原台遺跡は、秋田県教育委員会が昭和60(1985)年に分布調査を行い、翌昭和61(1986)年に範囲確認調査を行ったが、分布調査で縄文中期・後期の土器片が採集されただけで、範囲確認調査では遺構・遺物とも出土しなかった。柏台遺跡は、西仙北町教育委員会が昭和57(1982)年に発掘調査している。この調査では、縄文後期の竪穴住居跡や土坑が検出されている。また上雨堤II遺跡は、秋田県教育委員会が昭和60(1985)年に発掘調査し、縄文後期の土器片が出土した。

弥生時代の遺跡として、上ノ台VI遺跡（46-25）・上ノ台X遺跡（46-46）の2遺跡が確認されているが、2遺跡とも発掘調査は行われておらず、土器片が確認されたのみである。

奈良・平安時代の遺跡として、前述した寺沢遺跡と上雨堤II遺跡が確認されている。寺沢遺跡では焼失家屋が、上雨堤II遺跡では掘立柱建物跡や土師器、須恵器がそれぞれ検出された。

中世の地頭領主については、元弘没収地の宿命を負って領主層が頻々と交代したと推定されている以外、詳細は不明である。戸沢氏盛が14世紀末頃、土買川流域を押させて小杉山を隠居所にしたといい(戸沢家譜)、また室町期に淀河(協和町)・長野(中仙町)を領有した八戸南部氏が、応永17(1410)年、安東氏と戦って刈和野に陣をしいたと伝えられているが(南部世譜附録)、当時の支配の様子を具体的に示す文献史料は極めて乏しく、真偽は定かではない。それ故に統治上・軍事上の拠点となった中世城館跡は、史料として第一級の価値をもつと言える。西仙北町内では、これまで寄騎館(46-31)・茶臼館(46-32)など12箇所で中世城館跡が確認されている。

戦国期には、角館城主戸沢氏の勢力が当町域をおおった。天正18(1590)年、戸沢光盛が豊臣秀吉から当知行を安堵された中に、心像・尻引・高林の名がある。大沢郷や小杉山などは、太閤蔵入地に指



第3図 常野遺跡と周辺遺跡位置図

定されたようである。幕藩体制下では当初、山本郡（北浦郡・仙北郡）一円は佐竹氏の管轄下に置かれたが、由利郡と境を接する雄物川南部の大沢郷・強首地区だけは、政治情勢の変動を受けて藩主が頻々と交代することになり（本城・本多正純→亀田・岩城氏→内・酒井氏《一部が幕府領になる》→矢島・生駒氏）、最終的には、佐竹・岩城・生駒の3藩が境を接することになったが、その境界は洪水とあいまって複雑であり、3藩間の紛争の種となつた。佐竹氏領下の行政村は、刈和野町を親郷として河北の今泉・心像・小杉山・半道寺4か村、河南の寺館・高城・大巻・金山沢・九升田・強首6か村がいずれもその寄郷に位置づけられる。岩城・生駒領下の由利郡に属したのは、北野目・大沢郷宿・大沢郷寺・杉山田・江原田・円行寺・木壳沢・三条川原・正手沢の9か村である。心像西野経塚（46-12）・心像市道の窯跡（46-15）・佐竹藩御本陣跡（46-30）・亀田街道（46-41）等は、当時の様相を今に伝えている。

註1 それぞれ「上野台遺跡」として報告書が刊行されているが、「上ノ台XII」と同一の遺跡である。

第1表 常野遺跡周辺の遺跡一覧表

『秋田県遺跡地図（県南版）』収載の周知の遺跡

※所在地はすべて西仙北町内

番号	遺跡名	所在地	時代	所有(蔵)者	保管場所	参考文献
46-1	上ノ台	刈和野字上ノ台	縄文	国有	西仙北町教育委員会	
46-2	四階沢	刈和野字漆原キツ沢7	縄文(晚期)	民有		『秋田県史考古編』
46-3	一ト鶴台	刈和野字一ト鶴台19	縄文(晚期)	公有	西仙北町教育委員会	
46-4	上雨堤I	土川字上雨堤1	縄文(晚期)	民有(小林弥吉)	西仙北町教育委員会 小林弥吉	『秋田県史考古編』
46-5	上雨堤II	土川字上雨堤116-2外	縄文(晚期)	民有	秋田県教育委員会	『上雨堤遺跡発掘調査報告書』
46-6	金精野	土川字刈布沢20	縄文(中期)	民有	小笠原藤太	『秋田県史考古編』
46-7	刈布沢	土川字刈布沢24-1	縄文(前・中期)	公有	西仙北町教育委員会	『刈布沢遺跡発掘調査報告書』
46-8	殿屋敷	土川字栗木沢59-1～60	縄文(晚期)	民有	小笠原多右衛門家 小笠原藤太	『秋田県史考古編』
46-9	大楽I	土川字大楽6～164	縄文	民有		
46-10	大楽II	土川字大楽7	経塚	民有		
46-11	小又口	土川字小又口10	縄文(晚期)	公有	心像会館(心像部落会)	
46-12	心像西野経塚	土川字心像西野	経塚	民有		『秋田県史考古編』 『西仙北町郷土誌』
46-13	寺村	土川字寺村120	縄文(晚期)	民有	佐々木惣重郎	
46-14	市道	土川字市道43	縄文	民有	嵯峨勘左衛門	
46-15	心像市道の窯跡	土川字天上沢1		公有		『秋田県の文化財第4集』 『西仙北町郷土誌』
46-16	常野	寺館字常野20外	縄文(前・中・後期)	民有		
46-17	高城	高城字白山19-53	縄文(晚期)	民有	佐々木秀司	
46-18	杉山田	杉山田字杉山田7	縄文(晚期)	民有	嵯峨勘左衛門 大友忠司	

番号	遺跡名	所在地	時代	所有(蔵)者	保管場所	参考文献
46-19	角間沢	大沢郷宿字角間沢 138外	縄文(晚期)	公有		
46-20	上ノ台I	強首字上ノ台11-1、 15-10、22		民有		『秋田県史考古編』
46-21	上ノ台II	強首字上ノ台100、 37、38、39	縄文 (中・晚期)	民有		
46-22	上ノ台III	強首字上ノ台162-1	縄文	民有		
46-23	上ノ台IV	強首字上ノ台149-1	縄文	民有		
46-24	上ノ台V	強首字上ノ台150	縄文	民有		
46-25	上ノ台VI	強首字上ノ台83~5 83-6	弥生	民有		
46-26	上ノ台VII	強首字上ノ台81	縄文(中期)	民有		
46-27	上ノ台VIII	強首字上ノ台94	縄文	民有		
46-28	上ノ台IX	強首字上ノ台63	縄文	民有		
46-29	柏台	強首字上ノ台1	縄文(後期)	公有	西仙北町中央公民館	
46-30	御本陣跡	刈和野字清光院後	御憩館跡	民有		『絵図面』 『月の出羽路』 (水尾づくしのまき) 『西仙北町郷土誌』
46-31	寄騎館	刈和野字寄騎館	縄文 (中・晚期) 中世	民有		『秋田県の中世城館』 『西仙北町郷土誌』 『月の出羽路』 (水尾づくしのまき) 『刈和野郷絵図』
46-32	茶臼館	刈和野字茶臼嶺1	中世	民有		『秋田県の中世城館』
46-33	黒沢館	土川字館ヶ沢1	中世	民有		『秋田県の中世城館』 『月の出羽路里の土川のまき 刈和野村』 『秋田風土記』 『秋田沿革史大成』 『新庄古老覚書』 『西仙北町郷土誌』
46-34	岩井堂	土川字菅生	中世	民有		『秋田沿革史大成』 『秋田県の中世城館』 『西仙北町郷土誌』
46-35	朝夷奈古柵	土川字大野1	中世	民有		『月の出羽路里の土川のまき 刈和野村』 『秋田県の中世城館』
46-36	館坡	土川字小杉山沢館沢 山 外	中世	民有		『月の出羽路、柳沢のまき』 『秋田風土記』 『秋田沿革史大成』 『秋田県の中世城館』
46-37	館ノ城	北野目字前山	中世	公有		『秋田県の中世城館』
46-38	高城	高城字家の下	中世	民有		『月の出羽路』(かねあら田の まき) 『秋田県の中世城館』
46-39	白坂館	大沢郷寺字白坂館31	中世	民有		『秋田県の中世城館』 『西仙北町郷土誌』

第2章 遺跡の環境

番号	遺跡名	所在地	時代	所有(蔵)者	保管場所	参考文献
46-40	御番所跡	大沢郷宿字岩瀬	近世	民有		『西仙北町郷土誌』 『秋田県文化財調査報告書第161集』
46-41	亀田街道	大沢郷宿字岩瀬外		公有		『西仙北町郷土誌』 『秋田県文化財調査報告書第161集』
46-42	キツカ沢館	大沢郷宿字キツガ沢 109	中世	民有		『秋田県の中世城館』
46-43	鳥声館	大沢郷字円行寺	中世	民有		『秋田県の中世城館』
46-44	祢宜館	九升田字前山	中世	民有		『秋田県の中世城館』
46-45	弥助堰	強首字上ノ台11-2		公有		『西仙北町郷土誌』
46-46	上ノ台X	強首字上ノ台14-1	弥生	民有		
46-47	上ノ台XI	強首字上ノ台22	縄文(中期)	民有		
46-48	戸川堤沢	大沢郷寺字戸川堤沢 1~45	縄文	佐藤弘 外 民有		
46-49	戸川堤沢II	大沢郷寺字戸川堤沢 1~45	縄文	佐藤弘 外 民有		
46-50	上ノ台XII	強首字上ノ台23-1	縄文(前・ 中・後期) ~中世	公有	秋田県教育委員会 西仙北町教育委員会	『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書III』 『上野台遺跡発掘調査報告書』
46-51	寺沢	九升田字寺沢 1~11	縄文	深浦丈司 外 民有	秋田県教育委員会	『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書III』
46-52	大巻	大巻字巻野570~640	縄文	菅原章 外 民有		
46-53	笹原台	刈和野字笹原台31外	縄文 (中・後期)	民有		『遺跡跡詳細分布調査報告書 秋田県文化財調査報告書第140集』

註

地図及び一覧に付した番号のうち、46-23などのような番号は、『秋田県遺跡地図（県南版）』に収載されている遺跡の市町村登録番号である。46は西仙北町を示している。

引用・参考文献

- (1) 西仙北町郷土誌編纂委員会 『西仙北町郷土誌』 1976 (昭和51) 年
- (2) 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981 (昭和56) 年
- (3) 秋田県教育委員会 『遺跡跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第140集 1986 (昭和61) 年
- (4) 秋田県教育委員会 『上雨堤遺跡発掘調査報告書—県道本荘・西仙北・角館線改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査—』 秋田県文化財調査報告書第149集 1986 (昭和61) 年
- (5) 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図（県南版）』 1987 (昭和62) 年
- (6) 秋田県教育委員会 『遺跡跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第155集 1987 (昭和62) 年
- (7) 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書III—上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡—』 秋田県文化財調査報告書第180集 1989 (平成元) 年
- (8) 西仙北町教育委員会 『上野台遺跡発掘調査報告書』 2000 (平成12) 年
- (9) 秋田県教育委員会 『遺跡跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第324集 2001 (平成13) 年

第3章 発掘調査の概要

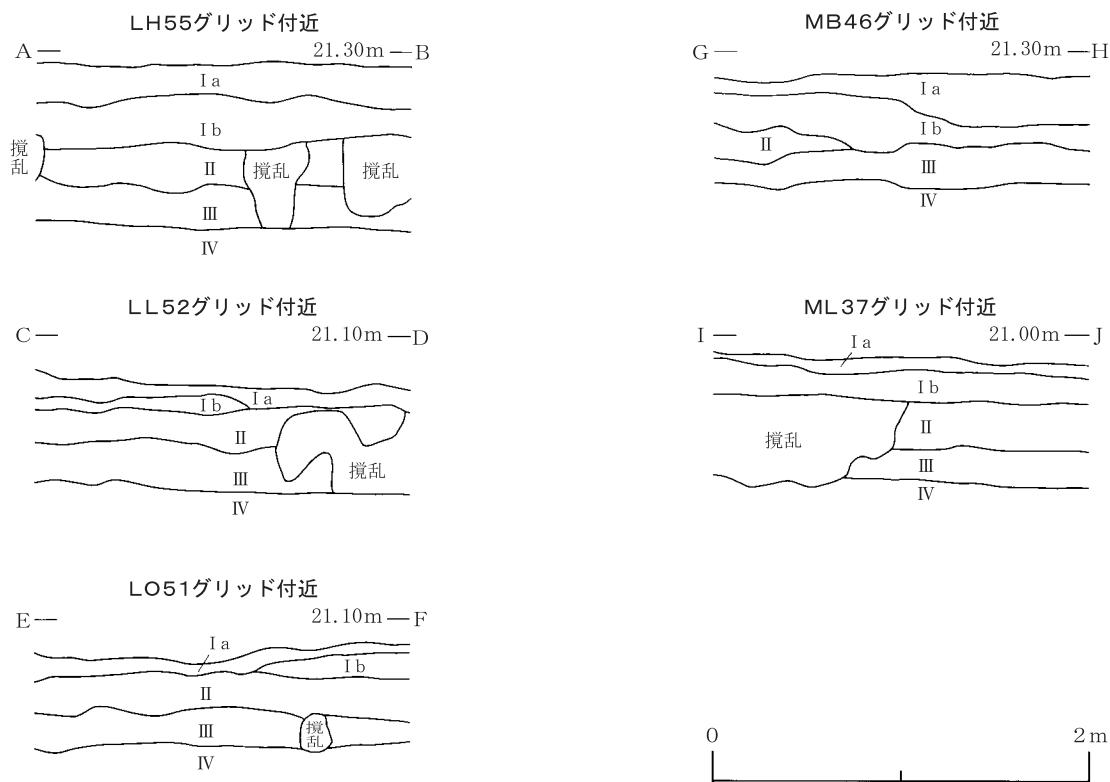
第1節 遺跡の概観

常野遺跡は既述のとおり、雄物川左岸の河岸段丘上に立地している。標高は20~21mである。今回発掘調査の対象となったのは、北東-南西方向約148m、北西-南東方向18mの範囲である。調査区内は、調査の前年まで畑地として利用されていたが、調査開始時は雑草が繁茂する荒地となっていた。

遺跡の基本層序は、調査区全域の層厚に違いはあるが共通している。I層は表土・耕作土であり、II層は黒色土が主である。III層は地山粒・炭化物粒が微量混入する地山漸移層で、IV層は黄褐色土の地山層となる。II・III層では近年の耕作による攪乱が認められたが、調査区東側南西部と西側北東部において特に著しかった（第4図）。

層序は以下の通りである。

第 I a層	黒褐色土(10YR3/1)	表土、耕作土	層厚 2~33cm
第 I b層	黒褐色土(10YR2/2)	表土、耕作土	層厚 5~30cm
第 II層	黒色土(10YR2/1)	遺物包含層、遺構（古代）確認面	層厚 8~56cm
第III層	黒褐色土(10YR3/2)	遺物包含層、地山漸移層、 遺構（古代）確認面	層厚 2~32cm
第IV層	にぶい黄褐色土(10YR5/3・5/4)~黄褐色土(10YR5/6)	地山、遺構（縄文）確認面	



第4図 遺跡基本層位

第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用し、調査区内に設置されている本荘西仙北角館線道路工事用の道路中心杭（No. 52）をグリッド原点MA50として、この杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、4m×4mのグリッドを設定した。また、南北基線には2桁の算用数字、東西基線にはアルファベット2文字の組み合わせを付し、各グリッドの名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。

遺物は、遺構内のは出土遺構名・出土層位・遺構番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。

調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は基本的に縮尺1/20で作成した。検出遺構の写真撮影は、35mmのモノクロ、カラーリバーサル、ネガカラーを使用した。また、遺跡全体の俯瞰写真はラジコンヘリによる空中写真撮影によった。



第5図 グリッド配置図

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成14年8月19日から同年10月16日まで実施した。表土除去は作業の効率化を図るため、調査前に重機によって行った。以下、調査日誌を基に調査の経過を記す。

【第1週】 8月19日～8月23日

19日午前、作業員に作業の実際を説明した。午後、器材を搬入。事務所内、コンテナハウス周辺、遺跡内外の環境整備・安全対策を行い、調査区東側にベルトコンベアーチャンバーを搬入・設置した。20日、西側の粗掘り及び遺構確認調査を開始し、並行して確認調査時のトレーニング排土除去作業を行った。21日、東側で焼土遺構1基(S N15)を確認した。23日、西側で土坑と思われるプランを2基(S K01・02→後SKTに変更)を確認し、精査を開始した。

【第2週】 8月26日～8月29日

先週に引き続いて、西側の粗掘り・遺構確認作業を進めた。26日、溝状のプラン(S D03)を確認し、精査を開始した。並行して東側のトレーニング排土除去作業を行った。27日、西側の遺構確認作業が終了した。28日、東側の粗掘り及び遺構確認作業を開始した。29日、地山レベリングを行い、西側の調査を終了した。

【第3週】 9月2日～9月6日

東側の調査を進めた。2日、西側の調査終了写真を撮影した。S N15の調査を終了した。3日、西側の基本土層断面図作成が終了した。4日、土坑1基(S K19→後SKTに変更)を確認し精査を開始した。並行して柱穴様ピットの精査を進めた。5日、土坑2基(S K25・37→25は後SKTに変更)を確認し、精査を開始した。6日、土坑3基(S K53・55・56)を検出した。

【第4週】 9月9日～9月13日

先週に引き続き、東側の遺構確認調査及び検出した遺構の精査を行い柱穴様ピット群の平面図作成作業を開始した。9日、SK19・25の調査を終了した。10日、土坑1基(S K76)、焼土遺構1基(S N81)を検出した。中央部の遺構確認精査を行い、柱穴様ピットを数基検出した。11日、S N81より土錘・流動滓が出土した。土坑1基(S K110)を検出した。西仙北町文化財保護審議会委員佐藤好攻氏が見学のため来跡した。12日、SK76の精査を進めた。13日、遺跡内中央部を流れる用水路周辺の環境整備を行った。土坑2基(S K84・97→後SKTに変更)を検出し、S N81の調査を終了した。

【第5週】 9月18日～9月20日

東側の調査を引き続き行った。検出した土坑・柱穴様ピットの精査及び図面作成を重点的に進めた。20日、SK79の遺物出土状況写真の撮影を行った。SK79・84の調査を終了した。土坑1基(S K204)を検出した。

【第6週】 9月24日～9月27日

東側で検出した遺構の精査・調査を引き続き行い、遺構確認のための掘り下げを東端部に向かって進めた。週末にベルトコンベアーチャンバーの搬出を控え、移動・撤収作業を行った。25日、協和町立小種小学校の児童28名と引率教員5名が総合学習の一環として来跡し、模擬発掘体験などを行った(図版4)。

第3章 発掘調査の概要

27日、SK97の調査を終了した。

【第7週】9月30日～10月4日

先週に引き続き、柱穴様ピット群の平面図作成を行い、東側基本土層図の作成に着手した。2日、台風により現場作業を中止した。4日、出土遺物及び採取した土壤サンプルの洗浄作業を行った。調査区南壁に沿ってサブトレンチを入れ、最終的な遺構確認を行った。

【第8週】10月7日～10月11日

先週に引き続き最終的な遺構確認作業を進め、並行して遺物の洗浄作業、撤収準備、空中写真撮影に向けた環境整備を行った。7日、東側南壁沿いにサブトレンチを入れることにより、最終的な遺構確認を行った。9日、東側の一部を再精査し、柱穴様ピット数基を検出した。空中写真撮影に向け、白線引き等の作業を行った。10日、天候不良のため、当初午前に予定していた空中写真撮影を午後に行った。西側・東側の調査終了写真を撮影した。11日、中央部・東側の地山レベリングを行い、引き渡しに向け陥し穴等を埋め戻した。

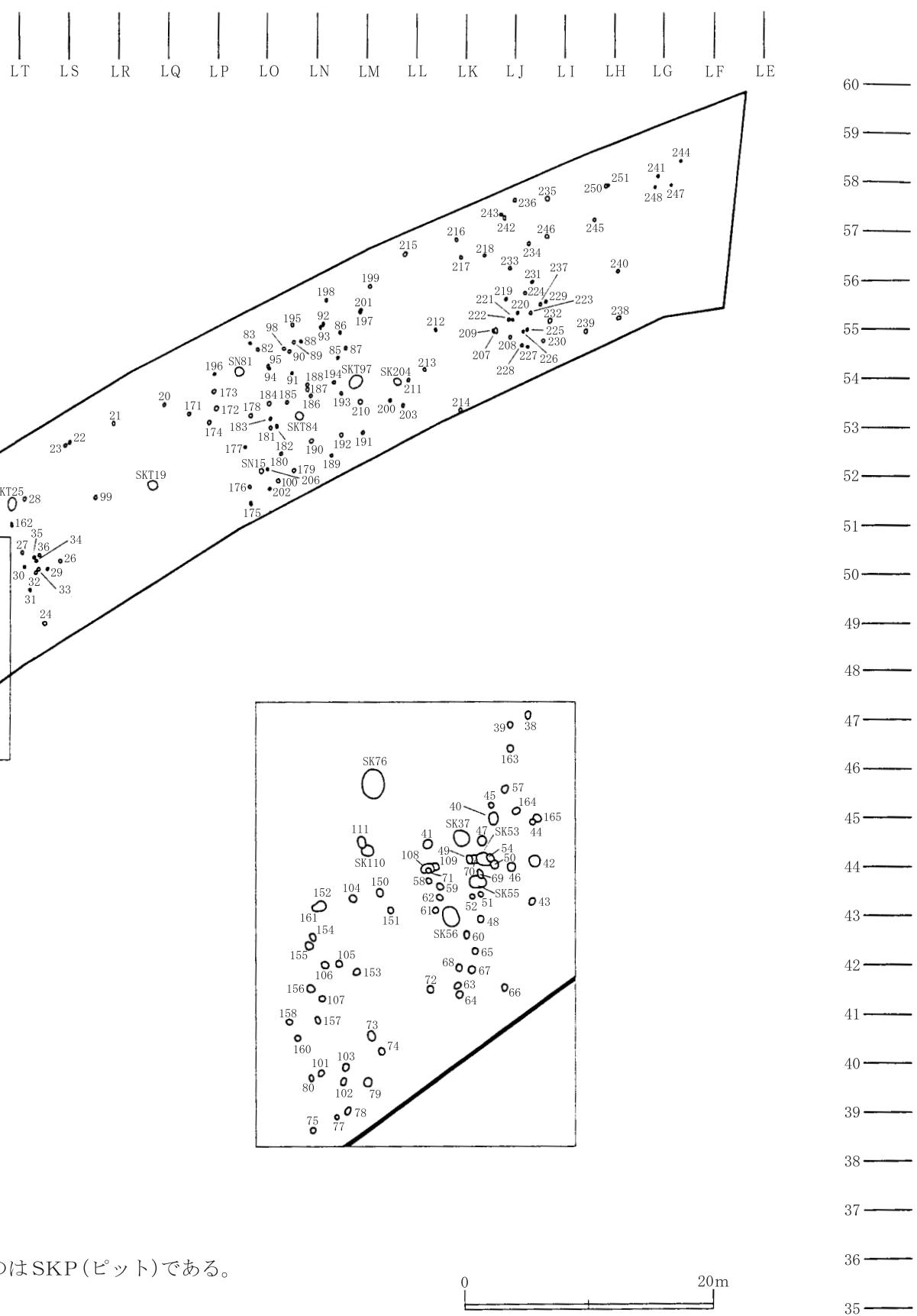
【第9週】10月15日～10月16日

撤収作業を開始した。16日午前、文化財保護室立ち会いのもと、現場引き渡しを行い、調査を終了した。

MR MQ MP MO MN MM ML MK MJ MI MH MG MF ME MD MC MB MA



第6図 検出



○はSKP(ピット)である。

出露構全体図

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、常野遺跡で検出した遺構は、土坑7基、陥し穴6基、焼土遺構2基、溝跡1条、柱穴様ピット222基の計238遺構である。これらの検出遺構は調査区全体に散在するが、調査区西側が希薄で中央部～東側で比較的多く検出した。遺構内からは、縄文時代と古代の遺物がいずれも少量ながら出土した。遺物の総計は161点で、その内訳は縄文土器65点、凹石1点、石皿1点、剥片4点、土師器86点、土錐1点、鉄滓3点である。これらのほとんどは小破片でその出土状況も散発的なものであったが、SK76土坑からは縄文時代の遺物が、SN81焼土遺構からは古代の遺物がまとまって出土した。

1 縄文時代

土坑7基、陥し穴6基の計13遺構を検出した。この他、縄文時代の遺物を伴う柱穴様ピット20基を検出した。その他大多数の柱穴様ピットからは時期を推定できる遺物は出土しなかったが、柱穴様ピットについては便宜上ここに一括して記載した。

(1) 土坑 (SK)

7基を検出した。うち6基は調査区中央部に、1基は調査区東側にある。遺物（縄文土器）から時期が推定される土坑は2基（SK53・76土坑）のみであるが、他の5基の土坑もほぼ同じ標高で確認されていることから、縄文時代に帰属するものと推定した。

① SK37 (第7図、図版2)

MA49グリッドにある。平面形は、最大径0.66m（北西～南東）、最小径0.48m（北東～南西）の楕円形で、確認面からの深さは0.24mである。底面はやや丸みを帶び、壁は急角度に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

② SK53 (第7図、図版2)

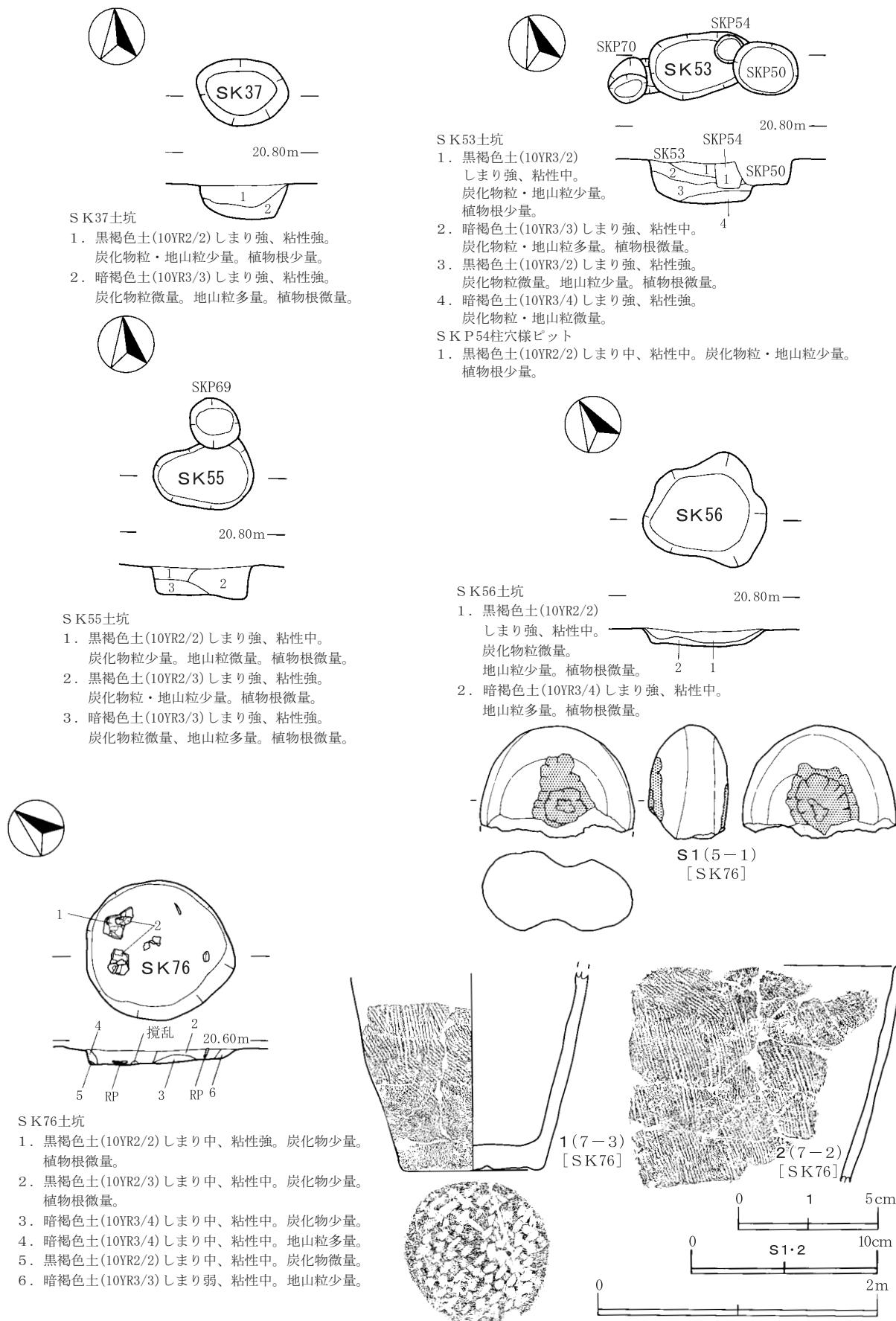
LT・MA49グリッドにある。SKP50・54・70柱穴様ピットと重複していたが、本土坑はSKP50・54柱穴様ピットより古く、SKP70柱穴様ピットより新しい。平面形は最大径推定0.76m（東～西）、最小径0.46m（北～南）の楕円形で、確認面からの深さは0.30mである。底面はやや丸みを帶び、壁は急角度に立ち上がる。遺物は3層から縄文土器の小破片2点が出土した。

③ SK55 (第7図、図版3)

MA48グリッドにある。SKP69柱穴様ピットと重複していたが、新旧関係は不明である。平面形は最大径推定0.70m（東～西）、最小径0.52m（北～南）の楕円形で、確認面からの深さは0.23mである。底面はほぼ平坦で、東側が僅かに窪んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

④ SK56 (第7図、図版2)

MA48グリッドにある。平面形は最大径0.84m（北西～南東）、最小径0.82m（北東～南西）の不整な方形で、確認面からの深さは0.10mである。底面はほぼ平坦で、壁は北西側は急角度に、南東側



第7図 SK37・53・55・56・76土坑、出土遺物

は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

⑤SK76（第7図、図版2）

MB50グリッドにある。平面形は最大径1.10m（北東—南西）、最小径1.00m（北西—南東）の楕円形で、確認面からの深さは0.10mである。底面はほぼ平坦で、壁は北西側が急角度に、南東側は緩やかに立ち上がる。遺物は、網代底の深鉢形土器の底部～胴部下半（第7図1）、胴部（第7図2）が出土した。1・2は土坑北東側の1・2層からまとまって出土した土器群を接合したものであり、同一個体と思われる。この他、1・2の出土位置周辺から縄文土器片15点が出土しているが、いずれも1・2と同一個体と思われる。石器は、北西側の1層から半分を欠損する凹石1点（第7図S1）が出土した。凹石S1は流紋岩を石材とし、重さは198.8gである。

⑥SK110（第8図、図版2）

MB49グリッドにある。SKP111柱穴様ピットと重複していたが、本土坑が古い。平面形は最大径0.63m（東—西）、最小径0.46m（北—南）の楕円形で、確認面からの深さは0.10mである。底面は平坦で、壁は東側は緩やかに、西側は急角度に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

⑦SK204（第8図、図版2）

LL53グリッドにある。平面形は最大径0.80m（北西—南東）、最小径（北東—南西）0.37mの楕円形で、確認面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

（2）陥し穴（SKT）

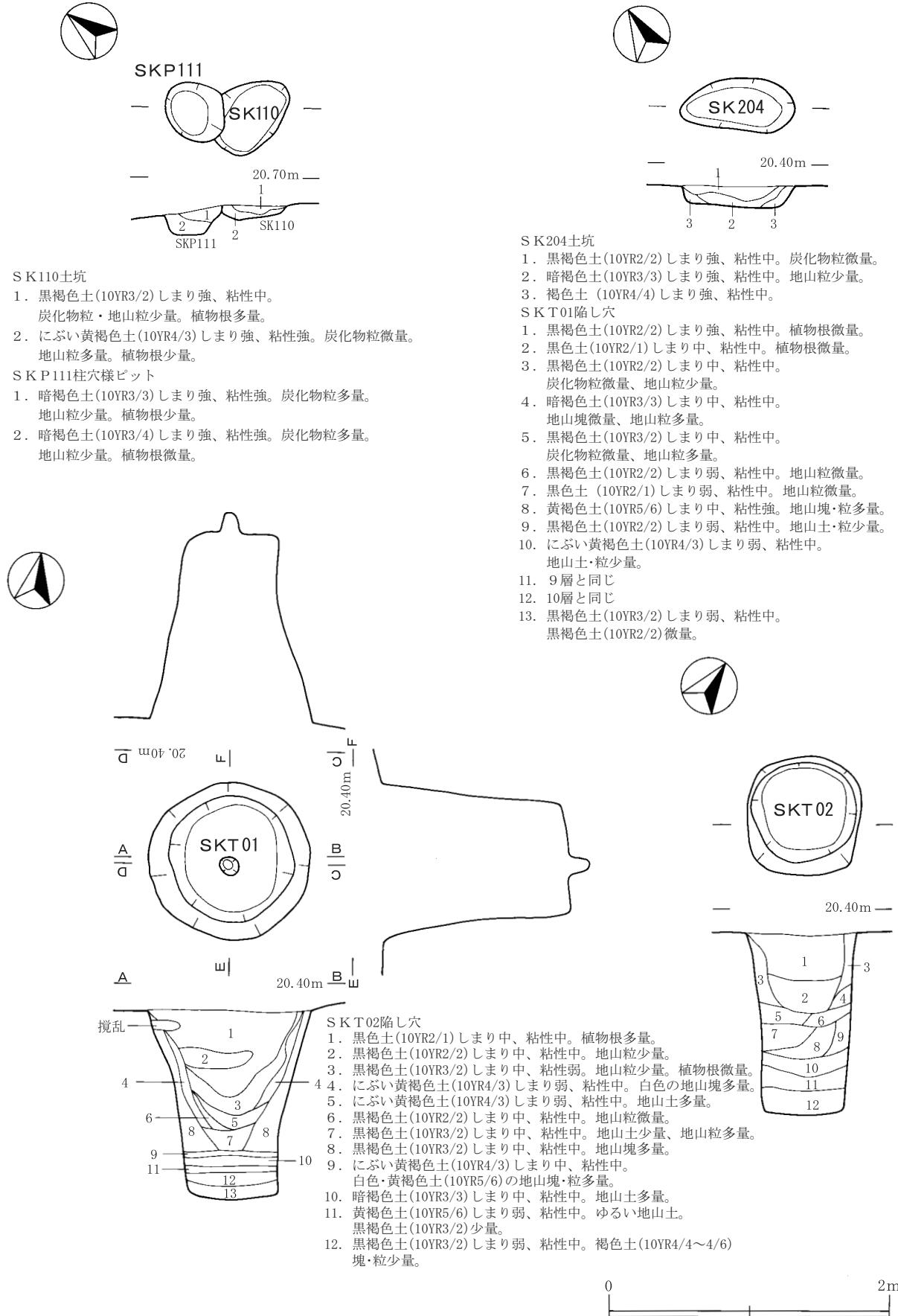
調査区西端部から2基、調査区東側から4基、計6基を検出した。形状と類例から、時期は縄文時代前期に帰属すると判断される。6基中3基の底面には逆茂木の痕跡が確認されており、規模・平面形が類似し、ある程度の間隔をおいて点在することから、ほぼ同時期に構築されたものと推定される。なお、3基（SKT19・84・97陥し穴）の埋土下部から検出した炭化材の分析結果については、第5章を参照して頂きたい。

①SKT01（第8図、図版3）

MM36・37グリッドにある。平面形は最大径1.16m（北—南）、最小径1.10m（東—西）の略円形で、確認面からの深さは1.35mである。底面はほぼ平坦で、その平面形は最大径0.88m（北—南）、最小径0.65m（東—西）の楕円形である。壁は底面から中位にかけてほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部まではやや外傾する。8層は壁の崩落土とみられる堆積である。底面のほぼ中央部には深さ0.136mの柱穴状の掘り込みがあり、その平面形は、0.14m（北西—南東）、0.13m（北東—南西）の円形を呈する。その底面はほぼ平らで、人為的な掘り込みとみられる。遺物は出土しなかった。

②SKT02（第8図、図版3）

ML37グリッドにある。平面形は最大径0.86m（北東—南西）、最小径0.80m（北西—南東）の不整な隅丸方形を呈し、確認面からの深さは1.27mである。底面はほぼ平坦で、その平面形は最大径0.59m（北東—南西）、最小径0.58m（北西—南東）の隅丸方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近でやや外傾する。3・4層は壁の崩落土とみられる堆積である。遺物は出土しなかった。



第8図 SK110・204土坑、SKT01・02陥し穴

③S K T19 (第9図、図版3)

L Q51グリッドにある。平面形は最大径0.76m（北東－南西）、最小径0.74m（北西－南東）の不整な円形で、確認面からの深さは1.40mである。底面はほぼ平坦で、その平面形は最大径0.47m（北東－南西）、最小径0.33m（北西－南東）の楕円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近でやや外傾する。3・5層は壁の崩落土とみられる堆積である。14層からは多量の炭化材を検出した。遺物は出土しなかった。

④S K T25 (第9図、図版3)

L T51グリッドにある。平面形は最大径0.89m（北－南）、最小径0.76m（東－西）の不整な楕円形で、確認面からの深さは1.24mである。底面はほぼ平坦で、その平面形は最大径0.48m（北西－南東）、最小径0.44m（北東－南西）の円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁のみが開口部付近でやや外傾する。底面のほぼ中央部には、深さ0.18mの柱穴状の掘り込みがあり、平面形は最大径0.16m（北東－南西）、最小径0.14m（北西－南東）の略円形である。その底面はほぼ平らであり、人為的な掘り込みとみられる。遺物は出土しなかった。

⑤S K T84 (第9図、図版4)

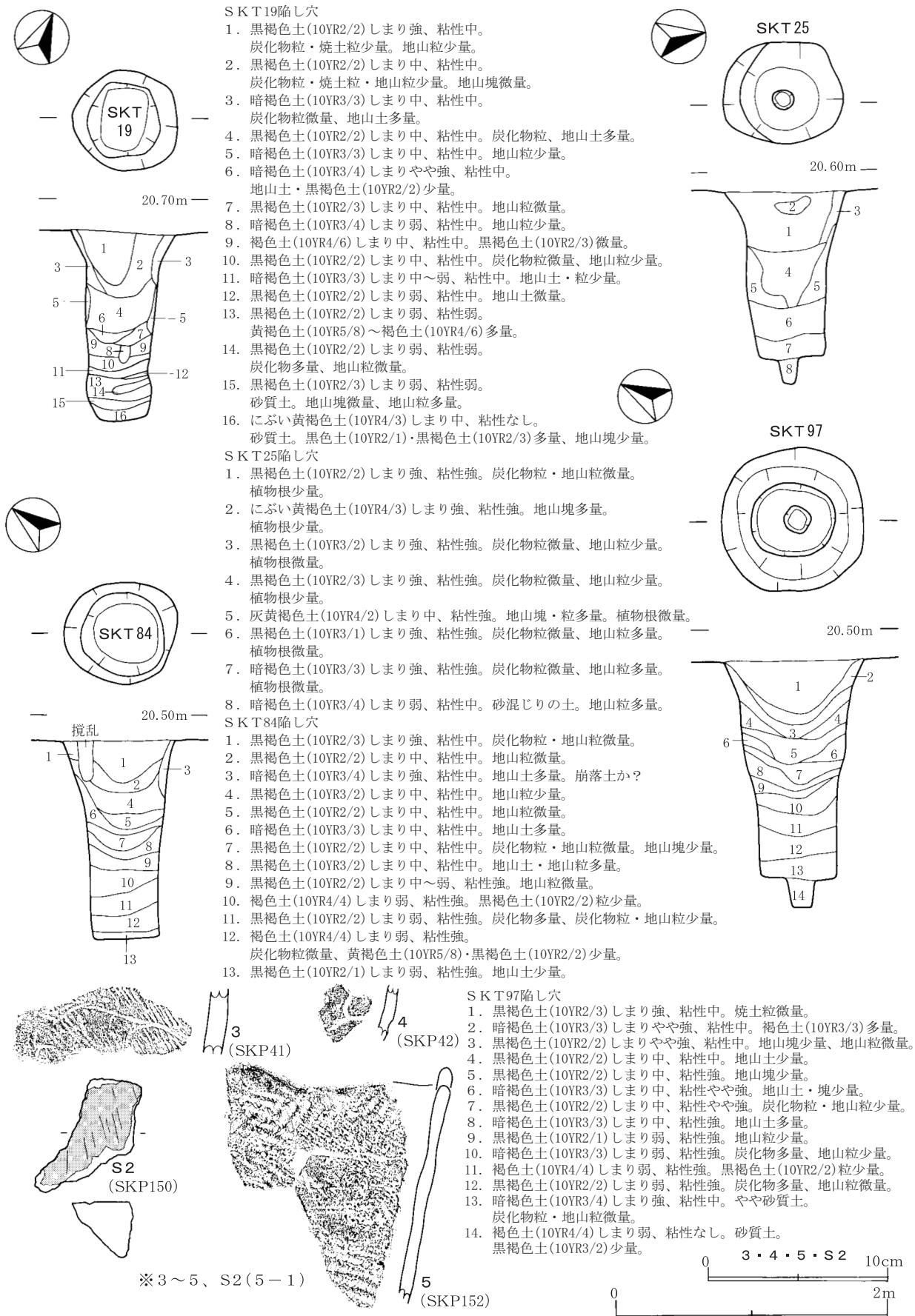
L Q51グリッドにある。平面形は最大径0.80m（北東－南西）、最小径0.76m（北西－南東）の不整な方形で、確認面からの深さは1.46mである。底面はほぼ平坦で、その平面形は最大径0.48m（北－南）、最小径0.43m（東－西）の略円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近でやや外傾する。3層は壁の崩落土とみられる堆積である。11層からは多量の炭化材を検出した。遺物は出土しなかった。

⑥S K T97 (第9図、図版4)

L M53・54グリッドにある。平面形は最大径1.06m（北東－南西）、最小径1.04m（北西－南東）の隅丸方形で、確認面からの深さは1.62mである。底面はほぼ平坦で、その平面形は最大径0.55m（北東－南西）、最小径0.46m（北西－南東）の楕円形である。壁は底面から中位にかけてほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部付近までは緩やかに外傾する。底面のほぼ中央部には、深さ0.205mの柱穴状の掘り込みがあり、平面形は、1辺が0.18mの方形である。その底面はほぼ平らであり、人為的な掘り込みとみられる。12層からは多量の炭化材を検出した。遺物は出土しなかった。

(3) 柱穴様ピット (S K P)

222基の柱穴様ピットを検出した。これらのピット群には規則的な配列は認められず、その埋土のほとんどがしまりのある単一層であった。各柱穴様ピットの位置については第6図を、ピット個々の規模等については、第2～4表を参照して頂きたい。遺物は20基から総計51点が出土した。遺物を伴う柱穴様ピット20基はすべて調査区中央部～東側に位置する。出土遺物の内訳は、縄文土器片46点（うち3点を図示：第9図3～5）、石器剥片4点、石皿1点（第9図S 2）である。3は深鉢形土器の胴部で地文の上に沈線文様が施されている。4は小破片で器形・部位は不明であるが、沈線で区画された文様体が僅かに残ることから縄文時代中期後半の所産と推定される。5は、深鉢形土器の口縁部である。胎土の状況や口縁部が波状を呈することから縄文時代中期以降のものと推定される。石皿S 2は、底部破片で凝灰岩を石材とする。重さは49.1gである。



第9図 SKT 19・25・84・97隅し穴、出土遺物

第2表 柱穴様ピット観察表（1）

遺構番号	所在区	平面形状	径または辺長 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
SKP004	MO36	不整な楕円形	26×20	10.6	19.98	
SKP005	MO37	方形	20×17	15.7	20.14	
SKP006	MO37	円形	22×19	13.2	20.22	
SKP007	MN37	方形	20×18	12.5	20.20	
SKP008	M J 40	不整な方形	20×17	20.2	20.30	
SKP009	M K 40	方形	20×16	9.5	20.58	
SKP010	MM37	不整な方形	30×28	13.5	20.12	
SKP011	MN35	方形	24×17	19.2	19.88	
SKP012	MM37	不整な方形	28×21	8.0	20.20	
SKP013	MM37	楕円形	22×18	6.2	20.20	
SKP014	MM36	楕円形	24×16	13.5	20.11	
SKP020	L Q 53	方形	40×28	10.2	20.22	
SKP021	L R 53	楕円形	25×20	19.8	20.12	
SKP022	L R・L S 52	円形	25×24	6.0	20.28	
SKP023	L S 52	方形	22×21	9.8	20.26	
SKP024	L S 48・49	不整な方形	24×22	8.2	20.44	
SKP026	L S 50	楕円形	24×22	17.0	20.35	
SKP027	L S 50	方形	30×26	15.3	20.39	
SKP028	L S 51	楕円形	33×21	14.7	20.31	
SKP029	L S 50	方形	20×20	7.9	20.45	
SKP030	L S 50	楕円形	26×20	18.0	20.39	
SKP031	L S 49	不整な楕円形	26×20	8.4	20.47	
SKP032	L S 49・50	略円形	24×22	7.6	20.46	
SKP033	L S 50	楕円形	24×19	7.7	20.46	
SKP034	L S 50	楕円形	26×18	13.2	20.43	
SKP035	L S 50	略円形	18×18	11.9	20.44	
SKP036	L S 50	不整な方形	24×22	9.0	20.47	
SKP038	L T 50	楕円形	31×26	10.6	20.47	
SKP039	L T 50	略円形	28×26	11.6	20.48	
SKP040	L T・MA49	楕円形	48×40	20.1	20.39	剥片1点出土。
SKP041	MA49	方形	48×34	22.0	20.38	縄文土器1点（第9図3）出土。
SKP042	L T 49	楕円形	50×33	15.8	20.39	縄文土器1点（第9図4）出土。
SKP043	L T 48	不整な方形	24×20	12.3	20.44	
SKP044	L T 49	方形	28×25	17.2	20.40	S K P 165より新しい。
SKP045	L T・MA49	不整な方形	21×19	12.2	20.47	
SKP046	L T 48・49	方形	30×28	18.3	20.38	
SKP047	MA49	楕円形	42×30	25.6	20.33	
SKP048	MA48	楕円形	26×22	8.2	20.50	
SKP049	MA49	楕円形	32×27	33.0	20.24	S K P 70より新しい。
SKP050	L T・MA49	楕円形	48×38	18.9	20.37	S K P 54より新しい。
SKP051	MA48	方形	28×26	34.4	20.25	
SKP052	MA48	略円形	24×22	8.2	20.49	
SKP054	L T・MA49	(推) 楕円形	(推) 22×20	18.0	20.35	S K P 50より古く、S K 53より新しい。
SKP057	L T 49	楕円形	23×18	10.2	20.49	
SKP058	MA48	円形	28×28	37.0	20.21	
SKP059	MA48	不整な方形	42×34	33.6	20.25	縄文土器3点出土。
SKP060	MA48	不整な楕円形	30×26	12.8	20.45	
SKP061	MA48	円形	18×18	6.1	20.51	
SKP062	MA48	方形	32×21	28.3	20.30	
SKP063	MA47	略円形	24×20	21.9	20.37	
SKP064	MA47	楕円形	28×24	20.3	20.39	
SKP065	MA48	円形	23×22	12.9	20.45	
SKP066	L T 47	楕円形	22×19	9.1	20.50	
SKP067	MA47・48	不整な楕円形	35×28	12.6	20.47	
SKP068	MA47・48	円形	17×16	11.9	20.48	
SKP069	MA48	略円形	38×34	39.8	20.17	S K 55と切り合う（新旧関係不明）。
SKP070	MA49	(推) 楕円形	(推) 30×25	15.8	20.40	S K 53・S K P 49より古い。
SKP071	MA48・49	方形	23×22	26.3	20.27	S K P 108より古い。
SKP072	MA47	略円形	22×19	16.2	20.42	
SKP073	MB47	略円形	25×24	15.1	20.46	
SKP074	MB47	方形	22×22	22.8	20.37	
SKP075	MB46	楕円形	21×18	11.3	20.53	
SKP077	MB46	方形	22×22	28.7	20.32	
SKP078	MB46	方形	18×17	8.9	20.52	
SKP079	MB46	不整な方形	38×34	33.5	20.26	
SKP080	MB46	円形	18×16	6.3	20.56	
SKP082	L O 54	方形	22×19	16.3	20.00	
SKP083	L O 54	方形	24×22	17.4	19.98	

第3表 柱穴様ピット観察表（2）

遺構番号	所在区	平面形状	径または辺長 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
SKP085	LM54	略円形	20×18	18.3	20.11	
SKP086	LM54	方形	18×16	16.1	20.17	
SKP087	LM54	円形	15×14	9.8	20.22	
SKP088	LN54	方形	18×14	14.4	20.16	
SKP089	LN54	略円形	22×21	22.8	20.07	
SKP090	LN54	円形	20×18	12.6	20.12	
SKP091	LN54	方形	20×18	17.1	20.13	
SKP092	LM55	楕円形	19×16	13.6	20.19	
SKP093	LM54・55	略円形	19×18	17.4	20.05	
SKP094	LN54	(推)楕円形	(推)21×16	9.0	20.18	S K P 95より古い。
SKP095	LN54	楕円形	22×18	20.2	20.05	S K P 94より新しい。
SKP098	LN54	楕円形	24×21	15.5	20.04	
SKP099	LR51	円形	20×20	11.8	20.34	
SKP100	LN51	不整な楕円形	30×24	14.2	20.23	
SKP101	MB46	略円形	20×18	11.5	20.49	
SKP102	MB46	方形	32×30	45.4	20.14	
SKP103	MB46・47	円形	22×20	18.8	20.41	
SKP104	MB48	不整な方形	28×24	11.1	20.47	
SKP105	MB48	楕円形	26×24	16.0	20.42	
SKP106	MB48	円形	20×20	9.8	20.50	
SKP107	MB47	楕円形	25×20	18.0	20.41	
SKP108	MA48・49	不整な楕円形	(残)53×36	31.8	20.23	縄文土器3点出土。SKP71より古く、SKP109より新しい。
SKP109	MA49	(推)楕円形	(推)34×26	33.5	20.25	S K P 108より古い。
SKP111	MB49	不整な楕円形	47×40	18.0	20.30	縄文土器1点出土。SK110より新しい。
SKP114	ME46	方形	19×19	7.7	20.54	
SKP115	ME46	方形	20×20	24.5	20.35	
SKP116	ME46	楕円形	(推)28×22	19.9	20.42	S K P 117より古い。
SKP117	ME46	不整な楕円形	28×25	35.9	20.25	S K P 116より新しい。
SKP118	ME46	方形	26×26	17.9	20.47	
SKP119	ME46	略円形	24×22	21.5	20.41	剥片1点出土。
SKP120	ME46	楕円形	24×21	22.0	20.39	
SKP121	ME46	方形	30×26	15.7	20.48	
SKP122	ME46	不整な方形	28×28	10.7	20.52	
SKP123	ME45・46	方形	24×23	10.5	20.53	
SKP124	ME45	方形	24×24	15.6	20.48	
SKP125	ME45	不整な方形	30×30	31.6	20.32	
SKP126	ME45	楕円形	27×22	11.8	20.49	縄文土器1点出土。
SKP127	ME44	方形	26×24	9.7	20.56	
SKP128	MF44	不整な方形	20×18	17.0	20.47	縄文土器1点出土。
SKP129	MF44	方形	26×24	21.8	20.41	
SKP130	MF44	略円形	22×22	20.1	20.42	
SKP131	MF・MG43	楕円形	38×28	21.7	20.45	
SKP132	MD50	楕円形	36×28	17.3	20.17	
SKP133	MD50	楕円形	26×21	27.4	20.07	
SKP134	MD49・50	(推)円形	(推)42×38	20.7	20.14	
SKP135	MD49	円形	18×18	11.6	20.28	
SKP136	MD49	方形	25×24	7.2	20.32	
SKP137	MD49	方形	20×18	11.6	20.28	
SKP138	MD49	不整な方形	28×22	15.9	20.23	
SKP139	MD49	円形	26×24	7.8	20.33	
SKP140	MD49	円形	24×22	8.7	20.32	
SKP141	MD49	方形	28×28	15.8	20.30	
SKP142	MD48	方形	26×26	8.2	20.36	
SKP143	MD48	楕円形	39×34	10.0	20.37	
SKP144	MD・ME48	円形	22×18	8.5	20.44	
SKP145	MD48	楕円形	20×16	6.8	20.39	
SKP146	ME48	楕円形	38×24	8.0	20.50	
SKP147	ME48	不整な楕円形	49×36	18.4	20.40	
SKP148	ME47	方形	16×16	13.6	20.45	
SKP149	ME47	楕円形	50×30	17.4	20.42	
SKP150	MB48	方形	35×32	30.7	20.24	縄文土器4点・石皿1点(第9図S2)出土。
SKP151	MA・MB48	略円形	23×20	18.5	20.37	
SKP152	MB48	(推)楕円形	(推)36×30	30.0	20.25	縄文土器3点(うち1点を図示:第9図5)出土。SKP161と切り合う(新旧関係不明)。
SKP153	MB47	楕円形	18×15	9.9	20.46	
SKP154	MB48	略円形	22×20	26.8	20.28	
SKP155	MB48	不整な方形	26×24	37.3	20.19	縄文土器2点出土。
SKP156	MB47	楕円形	26×21	17.6	20.39	
SKP157	MB47	方形	24×19	10.9	20.48	
SKP158	MC47	不整な方形	18×16	7.2	20.52	
SKP160	MB47	略円形	22×20	21.8	20.40	
SKP161	MB48	(推)円形	(推)20×16	26.8	20.27	S K P 152と切り合う(新旧関係不明)。
SKP162	L T50・51	円形	20×17	12.1	20.36	
SKP163	L T50	不整な方形	30×28	8.0	20.50	
SKP164	L T49	不整な方形	34×26	15.6	20.40	
SKP165	L T49	(推)楕円形	(推)36×27	16.2	20.39	S K P 44より古い。
SKP170	ME46	方形	28×28	12.3	20.53	
SKP171	L P53	円形	34×30	14.7	20.14	
SKP172	L O・L P53	方形	46×40	23.6	20.01	
SKP173	L O・L P53	略円形	36×32	16.6	20.06	
SKP174	L P53	楕円形	26×20	16.8	20.10	
SKP175	L O51	円形	34×32	23.2	20.17	縄文土器3点出土。
SKP176	L O51	略円形	30×26	24.0	20.15	
SKP177	L O52	方形	28×24	21.6	20.11	
SKP178	L O53	楕円形	34×20	17.5	20.05	
SKP179	LN52	不整な方形	22×22	11.5	20.24	

第4表 柱穴様ピット観察表(3)

遺構番号	所在区	平面形状	径または辺長 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
SKP180	L N52	方形	18×18	12.8	20.21	
SKP181	L N52	方形	22×22	11.6	20.15	
SKP182	L N52・53	略円形	21×20	12.8	20.15	
SKP183	L N53	楕円形	24×18	7.5	20.18	
SKP184	L N53	楕円形	32×26	15.1	20.06	
SKP185	L N53	方形	28×24	10.3	20.11	
SKP186	L N53	略円形	22×20	11.9	20.11	
SKP187	L N53	楕円形	25×22	9.1	20.14	
SKP188	L N53	不整な方形	26×25	14.0	20.09	
SKP189	L M52	不整な楕円形	28×22	12.3	20.21	縄文土器2点出土。
SKP190	L N52	不整な方形	33×32	27.8	20.05	
SKP191	L M52	楕円形	30×26	26.0	20.03	
SKP192	L M52	略円形	25×22	22.0	20.08	
SKP193	L M53	円形	16×15	10.6	20.18	
SKP194	L M53	方形	24×22	9.9	20.16	
SKP195	L N55	楕円形	28×24	30.6	19.84	
SKP196	L P54	略円形	25×21	14.6	20.04	
SKP197	L M55	(推)方形	(推)25×23	25.9	19.96	縄文土器1点出土。SKP201より古い。
SKP198	L M55	楕円形	26×22	19.9	19.98	
SKP199	L L55	略円形	24×22	22.8	19.96	
SKP200	L L53	不整な楕円形	24×21	15.0	20.10	
SKP201	L M55	略円形	20×18	20.4	20.02	SKP197より新しい。
SKP202	L N51	略円形	20×20	10.7	20.29	
SKP203	L L53	楕円形	30×22	17.1	20.08	
SKP206	L N52	略円形	20×19	8.4	20.27	
SKP207	L J 54・55	楕円形	48×34	25.9	20.02	縄文土器16点出土。SKP209より新しい。
SKP208	L J 54	方形	36×34	9.0	20.17	
SKP209	L J 54	(推)楕円形	(推)28×22	6.8	20.19	剥片1点出土。SKP207より古い。
SKP210	L M53	不整な方形	27×26	15.7	20.11	
SKP211	L L53	方形	22×15	9.7	20.12	
SKP212	L L 54・55	楕円形	20×14	5.6	20.08	
SKP213	L K54	方形	22×18	8.3	20.14	
SKP214	L K53	方形	19×18	6.6	20.11	
SKP215	L L56	円形	34×32	15.1	20.00	
SKP216	L K56	楕円形	23×17	11.0	20.10	
SKP217	L K56	略円形	21×18	12.6	20.08	
SKP218	L J 56	円形	20×20	11.7	20.15	
SKP219	L J 55	方形	24×20	8.6	20.21	
SKP220	L I 55	楕円形	26×19	12.8	20.17	
SKP221	L J 55	楕円形	22×16	7.5	20.22	
SKP222	L J 55	楕円形	38×25	12.3	20.17	
SKP223	L I 55	円形	24×22	25.4	20.21	
SKP224	L I 55	方形	24×20	12.2	20.18	
SKP225	L I 54・55	略円形	24×22	13.0	20.17	
SKP226	L I 54	楕円形	18×15	18.1	20.11	
SKP227	L I 54	不整な方形	22×20	13.5	20.14	
SKP228	L I 54	不整な楕円形	29×20	12.1	20.15	
SKP229	L I 55	方形	20×20	19.4	20.12	縄文土器3点出土。
SKP230	L I 54	楕円形	23×16	12.1	20.18	
SKP231	L I 55	楕円形	27×20	13.0	20.17	
SKP232	L I 55	楕円形	43×29	15.7	20.15	
SKP233	L J 56	不整な方形	24×19	9.3	20.22	
SKP234	L I 56	不整な楕円形	34×22	20.7	20.09	
SKP235	L I 57	略円形	34×32	33.6	19.95	
SKP236	L I・L J 57	円形	36×33	28.9	19.99	
SKP237	L I 55	円形	20×17	9.8	20.20	
SKP238	L G55	楕円形	38×26	13.8	20.19	
SKP239	L H54	円形	25×24	10.2	20.20	
SKP240	L G56	方形	20×20	10.1	20.23	
SKP241	L G58	略円形	30×26	15.7	20.15	剥片1点出土。
SKP242	L J 57	方形	30×27	19.8	20.08	
SKP243	L J 57	楕円形	31×19	10.7	20.16	
SKP244	L F58	方形	22×21	13.9	20.28	
SKP245	L H57	方形	16×16	8.9	20.25	
SKP246	L I 56	方形	34×32	35.6	19.97	縄文土器1点出土。
SKP247	L F57	楕円形	26×18	13.4	20.25	
SKP248	L G57	方形	24×22	24.5	20.12	
SKP250	L H57	楕円形	26×21	40.1	19.96	SKP251より新しい。
SKP251	L H57	方形	(推)22×22	25.6	20.12	SKP250より古い。

2 古代

焼土遺構 2 基、溝跡 1 条の計 3 遺構を検出した。

(1) 焼土遺構 (S N)

調査区東側で 2 基を検出した。1 基からは遺物が出土しなかったが、遺物が出土したもう 1 基とほぼ同じ標高で確認し、検出した位置も近接していたことからほぼ同時期のものと判断した。

① S N15 (第10図、図版 4)

L L・L O 52 グリッドにある。平面形は最大径 0.51m (東一西)、最小径 0.36m (北一南) の楕円形で、確認面からの深さは 0.23m である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

② S N81 (第10図、図版 4)

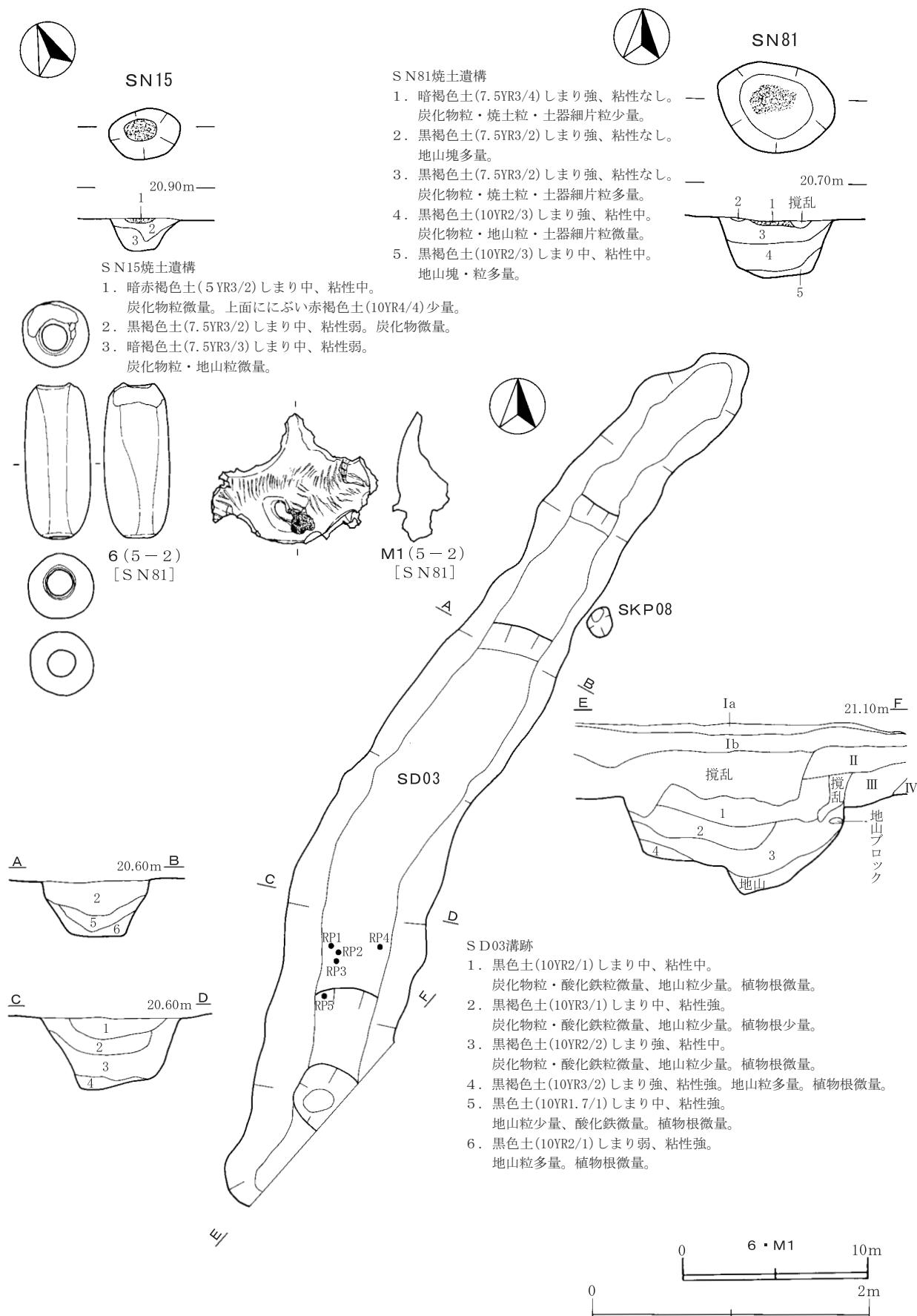
L O 54 グリッドにある。平面形は最大径 0.86m (北東一南西)、最小径 0.65m (北西一南東) の楕円形で、確認面からの深さは 0.40m である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、埋土中から土師器細片 79 点、4 層から土錐 1 点 (第10図 6)、3 層から鉄滓 3 点 (うち 1 点を図示: 第10 図 M 1) が出土した。6 は管状土錐あるいは筒形土錐と呼ばれるもので、曳網・巻網に使用したものとされる。重さは 95.1 g である。鉄滓 M 1 は流動滓で、重さは 120.3 g である。

(2) 溝跡 (S D)

調査区西側で 1 条を検出した。

① S D 03 (第10図、図版 4)

M I 40、M J 39・40 グリッドにある。北西一南東方向にのびており、南東側で調査区境界に至る。確認できた部分での長さは 7.06m、幅は 0.48~1.02m、確認面からの深さは 0.40~0.58m である。底面はほぼ平坦だが、南西方向に向かって深くなっている調査区境界付近で壅む。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、遺構南東端付近の 3 層から土師器小破片 3 点がまとまって出土した。この他、埋土中から土師器小破片 4 点が出土した。



第10図 S N15・81焼土遺構、S D03溝跡、出土遺物

第2節 遺構外出土遺物

縄文時代前期・中期・後期のものと思われる土器・土製品と石匙などの石器や土師器・須恵器などの古代の遺物がごく少量ずつ出土した。その総量は中コンテナ（容量18リッター）換算で9箱（縄文土器7箱、石器1.5箱、土師器・須恵器0.5箱）である。遺物の多くは調査区中央部～東側で出土し、西側からの出土は僅かであった。図示した遺物のうち、石器の重さや石質等については第5表にまとめた。

1 土器・土製品

(1) 縄文時代の土器・土製品（第11図～第12図、図版6～8）

① 縄文時代前期の土器（第11図7～11、図版6）

大木式土器（7、10、11）と円筒下層式土器（8、9）が出土した。7は胴部に網目状撚糸文が施されている。僅かに外反する口縁部に突起が付され、口唇部には指頭圧痕が施されている。8は深鉢形土器の口縁部付近で、隆帶上に半截竹管で施された刺突が連続する。9は深鉢形土器の胴部で、木目状撚糸文が施されている。10は深鉢形土器の胴部で、蛇行沈線文が縦位に展開する。11は深鉢形土器の口縁部付近で、鋸刃状の粘土紐が縦位に展開する。

② 縄文時代中期の土器（第11図12～18、20～23、図版6）

大木式土器（14、16～18、20、21、23）と円筒上層式土器（13、15）が出土したが、時期・土器型式の詳細が不明なものも数点出土している。14は折り返し口縁をもつ小型の深鉢形土器で、MO37グリッドから出土した土器群を接合したものである。口縁部には半截竹管で施された刺突文が連続し、小突起が4単位付されているものと思われる。胴部の文様は撚糸文を地文とし、小突起に対応する4本の懸垂隆帯が文様体を区画している。13・15は、絡条体圧痕と半截竹管による刺突文が施された深鉢形土器の胴部上半である。15では、貼付された隆帶上にも半截竹管による刺突文が施されている。16は深鉢形土器の胴部で、2条の綾絡文が縦位に施されている。12は波状口縁をもつ深鉢形土器の口縁部で、波状に沿って隆帶や円形刺突が施され、波頂部直下には盲孔が認められる。胎土の状況から中期初頭（あるいは前期まで遡るか）のものとしたが、詳細は不明である。17・18・20・21・23は、沈線による区画文様が縦位または横位に展開すると思われる土器群である。22は口縁部付近に隆帶が巡る。

③ 縄文時代後期の土器（第11図19、24～33、第12図34～37、図版6、7）

19は地文が撚糸で施され、沈線と列点文による文様が展開しているものと思われる。24～28、37は宮戸1b式に比定される土器群で、沈線で倒卵文や渦巻状の単位文が描かれている。25の外面には、煤状炭化物の付着が認められる。27は波状口縁をもつ深鉢形土器である。37は胴部全面に大きく倒卵状のモチーフが描かれたものと思われる。29～33は南境式に比定される土器群で、沈線によるクランク状の文様が描かれている。35は櫛目文が、34・36は撚糸文が施されている。いずれも小破片で文様構成の詳細は不明であるが、胎土の状況から後期の土器と判断した。

④ 土製品（第12図38～41、図版8）

土偶3点と土製品1点が出土した。39・40は、縄文時代中期の板状土偶の胸部である。39は乳房状突起をもち、半截竹管による刺突文が施されている。40は、並行沈線に沿って刺突文が施されている。

38は縄文時代後期の土偶脚部か。41は縄文時代後期の土器胴部を転用した土製品であるが、未完成で用途等は不明である。

(2) 古代の土師器・須恵器 (第12図42~47、図版5)

① 土師器 (第12図42~45)

出土した92点中4点を図示した。42、43はロクロ形成による甕の口縁部で、いずれも口縁部が外反する。44、45は壺の底部と思われる。いずれも回転糸切り（左回転）の痕跡が見られる。

② 須恵器 (第12図46、47)

出土した4点中2点を図示した。いずれも甕の胴部で外面にタタキ目が見られる。

2 石器 (第13図~第15図、図版8、9)

(1) 石匙 (第13図S3~S6、図版8)

出土した4点を図示した。つまみ状の小突起をもち、主として片面からの加撃によって刃部を作出した石器である。S3・4は、つまみの中軸線と刃部とがほぼ並行するいわゆる縦型石匙である。S5はつまみの中軸線と刃部とが約45°の角度で交わるいわゆる斜型石匙で、S3・4と比べるとつまみ部の抉りが弱い。S6は平面形状から石匙として分類したが、他の3点に比して大きく、抉りが鋸刃状に見られることから、石匙とはやや異なる機能を有していたことも考えられる。

(2) 石籠 (第13図S7~S10、第14図S11・12、図版8)

出土した6点を図示した。大小の厚手の剥片に粗い二次加工を施して、全体の形状がいわゆるヘラ状を呈するように作出された石器である。S7・8・11は、いずれも片側だけに刃部が作出されている。S9・10・12は刃部が欠損したものである。

(3) 搔器 (第14図S13・14、図版9)

出土した2点を図示した。剥片の一端に片面調整による急斜度の刃部を作出した石器で、2点とも裏面が反っている。

(4) 削器 (第14図S15・16、図版9)

出土した2点を図示した。剥片の側縁に連続的な二次調整によって刃部を作出した石器である。

(5) 磨製石斧 (第14図S17~S19、図版9)

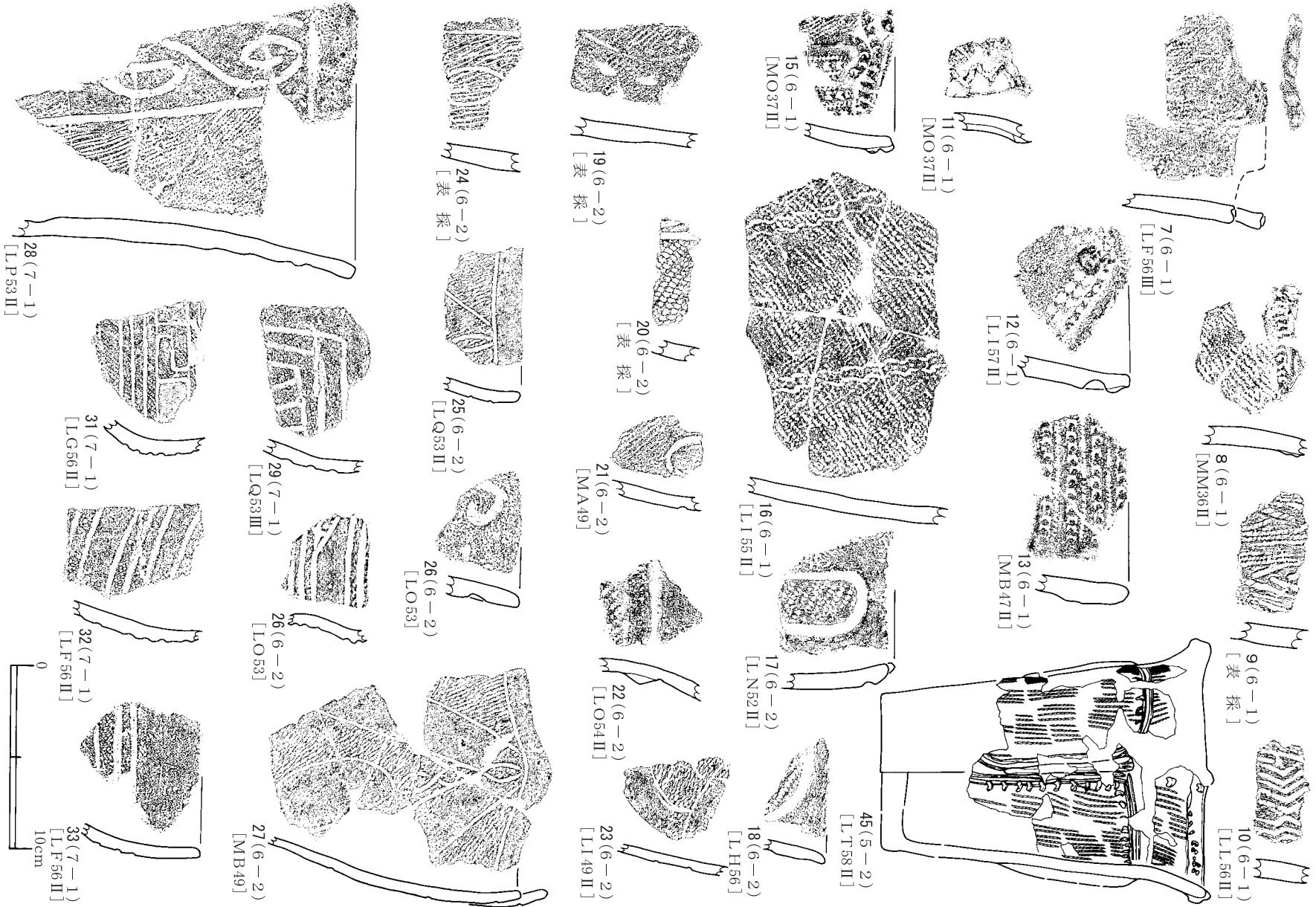
出土した3点を図示した。ある程度形を整えた後、研磨して表面を滑らかに加工している。いずれも欠損しているが、平面形が揆形に近い、いわゆる定角式石斧と推定される。S17は基部のみ、S18・19は刃部のみの出土である。

(6) 凹石 (第15図S20~S23、図版9)

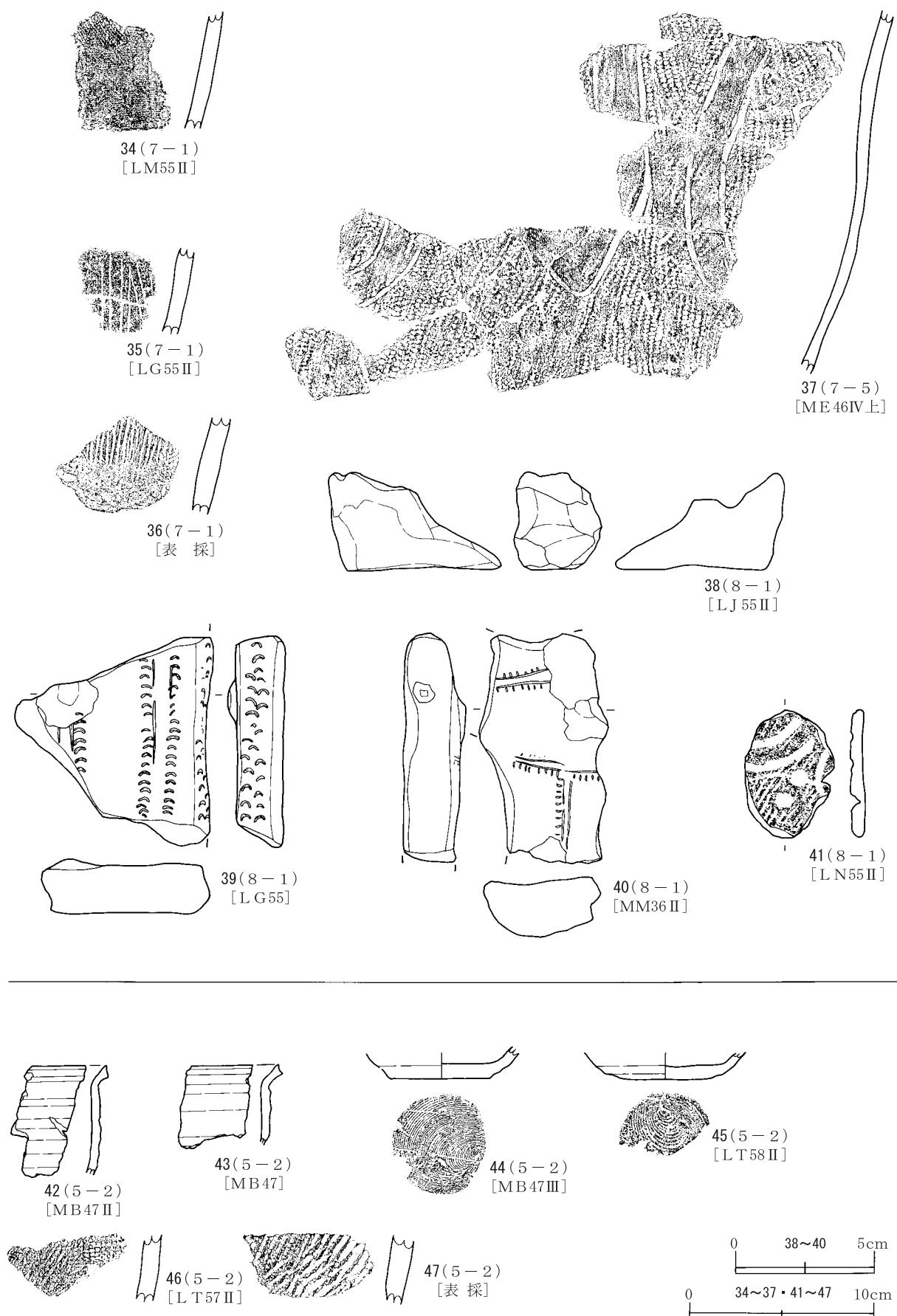
出土した4点を図示した。人工的な凹みを有する礫で、表裏や側面に複数の敲打痕をもつ。S20には、被熱痕が認められる。

(7) 敲石 (第15図24、図版9)

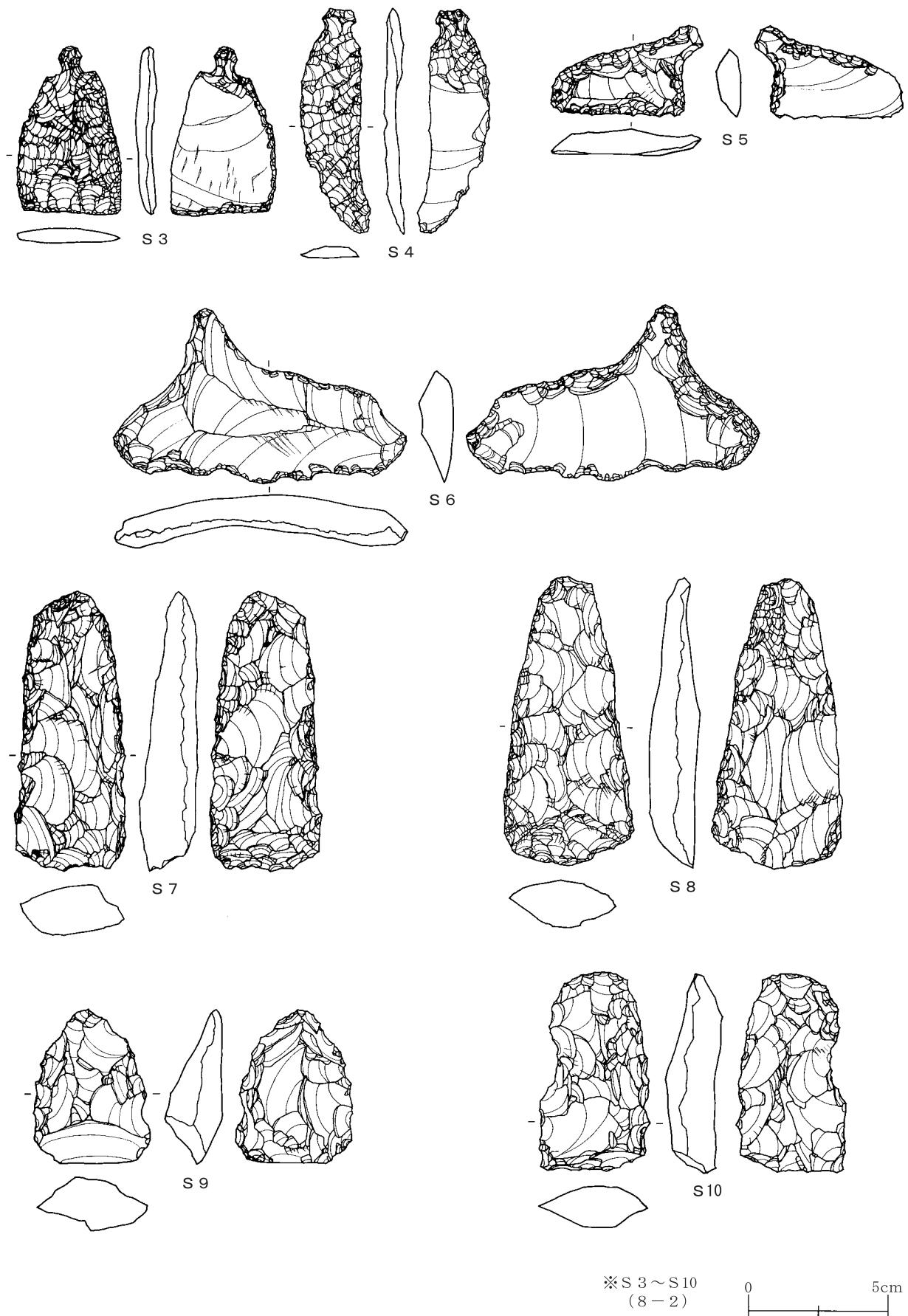
出土した1点を図示した。剥片剥離や調整剥離に用いた打撃具である。



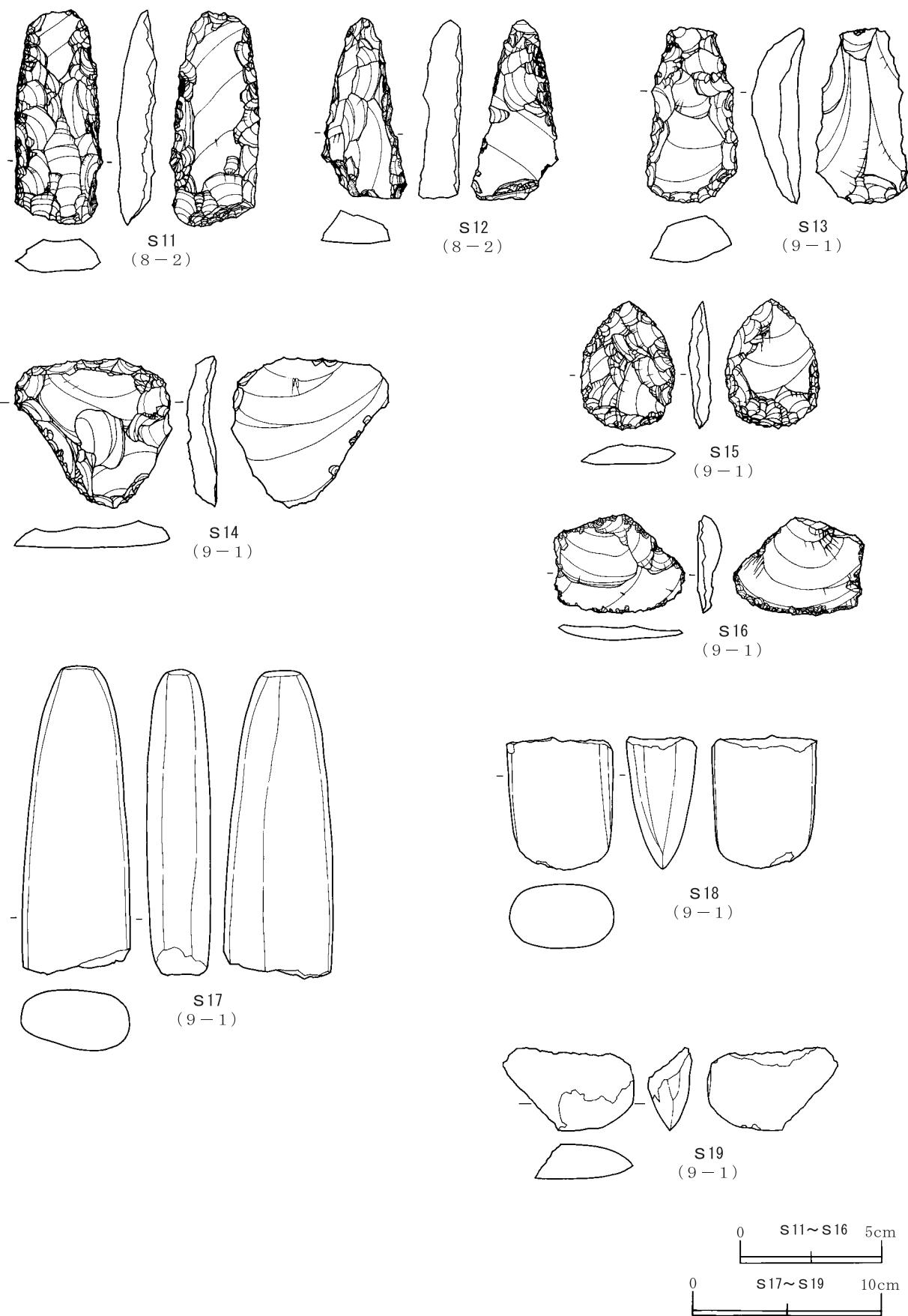
第11図 遺構外出土土器・土製品（1）



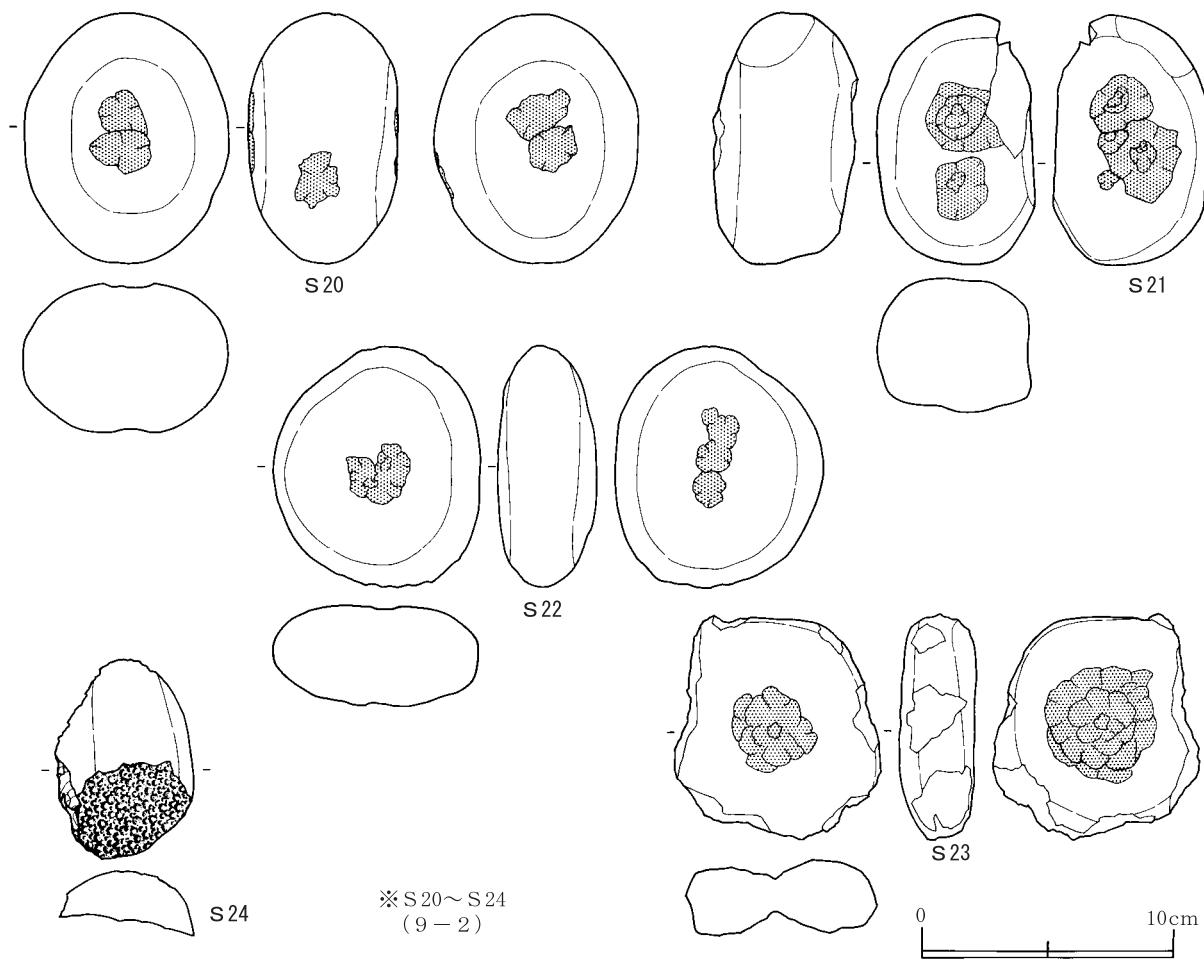
第12図 遺構外出土土器・土製品（2）



第13図 遺構外出土石器（1）



第14図 遺構外出土石器（2）



第15図 遺構外出土石器（3）

第5表 遺構外出土石器観察表

遺物番号	器種	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
S 3	石匙	L O51	6.0	3.8	0.8	15.2	チャート	縦型
S 4	石匙	L F 56Ⅲ層	8.0	2.6	0.7	10.5	頁岩	縦型
S 5	石匙	L G 56Ⅲ層	3.3	5.4	0.9	13.3	頁岩	斜型
S 6	石匙	L J 54Ⅰ層	6.3	10.5	1.8	67.9	頁岩	鋸刃状の抉り
S 7	石籠	M P 37	10.0	4.0	2.1	80.5	頁岩	片刃
S 8	石籠	L S 49Ⅲ層	10.4	4.7	1.8	68.6	頁岩	片刃
S 9	石籠	MA 48Ⅲ層	5.5	4.2	2.1	34.9	頁岩	基部のみ
S 10	石籠	L S 49Ⅱ層	7.2	4.0	2.1	46.4	頁岩	基部のみ
S 11	石籠	L I 57Ⅱ層	7.6	3.2	1.3	30.8	頁岩	片刃
S 12	石籠	L H 55Ⅲ層	6.4	3.0	1.4	22.9	頁岩	基部のみ
S 13	搔器	ME 47Ⅳ層上	6.2	3.3	1.8	28.9	頁岩	
S 14	搔器	MA 48Ⅱ層	5.3	5.6	1.1	26.8	頁岩	
S 15	削器	L G 58Ⅱ層	4.0	3.3	0.8	10.5	頁岩	
S 16	削器	L O 54Ⅱ層	3.5	4.6	0.9	9.9	頁岩	
S 17	磨製石斧	MN 37Ⅱ層	16.2	5.7	3.5	495.9	砂岩	基部のみ
S 18	磨製石斧	表採	7.0	5.6	3.7	199.3	凝灰岩	刃部のみ
S 19	磨製石斧	表採	4.3	6.9	2.3	56.7	砂岩	刃部のみ
S 20	凹石	L O 54	9.9	8.2	5.9	667.6	礫岩	被熱痕有り
S 21	凹石	L G 58Ⅱ層	9.9	6.3	5.7	261.4	凝灰岩	
S 22	凹石	L F 58Ⅱ層	9.5	8.2	3.9	353.5	凝灰岩	
S 23	凹石	L G 56Ⅱ層	8.9	8.2	3.0	238.5	礫質凝灰岩	
S 24	敲石	L P 53Ⅲ層	7.8	5.5	2.8	93.0	頁岩	

第5章 自然科学的分析

第1節 出土炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

常野遺跡は、雄物川左岸の段丘上に位置する。常野遺跡周辺の段丘面は、合計7面の段丘面が確認されており、常野の集落が位置する付近は低位I段丘、周囲の低地が低位II段丘に分類されている（土谷・吉川、1994）。常野遺跡は、低位I段丘から低位II段丘にかけて位置する。今回の発掘調査では、縄文時代と考えられる土坑や古代の遺物を伴う遺構等が検出されている。縄文時代では、同じような形態の土坑が間隔をおいて分布していることや遺物の量が少ないこと等から、集落ではなく狩猟場として利用されていた可能性が考えられている。

今回の分析調査では、各遺構内から出土した炭化材について、放射性炭素年代測定を行い、各遺構の時期に関する資料を得る。また、同一試料について樹種同定を併せて実施し、木材利用に関する資料を得る。

2 試料

試料は、5基の遺構内から出土した炭化材で、各遺構1点で合計5点（試料番号1～5）である。

3 方法

（1）放射性炭素年代測定

測定は、加速器質量分析法（AMS法）で行った。測定は、株式会社加速器分析研究所（IAA）が行った。

（2）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

4 結果

放射性炭素年代測定および同定結果を第6表に示す。炭化材の年代は、縄文時代と考えられる土坑で、5700BP（補正年代5830BP）～3780BP（補正年代3770BP）、古代の遺物を伴う遺構で960BP（補正年代 960BP）であった。また、炭化材の樹種は、広葉樹2種類（クリ・トネリコ属）トイネ科タケ亜科に同定された。なお、試料番号4には、炭化材の他に種類不明の種実遺体1点が認められた。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。また、種実遺体については、種類は不明であったため形態的特徴について記載する。

<炭化材>

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属 図版10 1a-1c

環孔材で、孔圈部は1～4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

第6表 放射性炭素年代測定および同定結果

番号	遺構	層位	質	種類	年代	$\delta^{13}\text{C}$	補正年代	CodeNo.
1	SKT19	14層	炭化材	イネ科タケ亜科	5700±30BP	-8.78±1.12‰	5830±30BP	IAAA-11616
2	SK76	2層	炭化材	クリ	3780±30BP	-26.59±1.13‰	3770±30BP	IAAA-11617
3	SKT84	11層	炭化材	イネ科タケ亜科	5670±30BP	-11.25±1.06‰	5790±30BP	IAAA-11618
4	SKT97	12層	炭化材 種実遺体	イネ科タケ亜科 不明種実	5700±30BP	-10.25±0.9‰	5820±30BP	IAAA-11619
5	SN81	4層下位	炭化材	トネリコ属	960±30BP	-24.24±0.93‰	960±30BP	IAAA-11620

- 1) 年代測定は、加速器質量分析法(AMS法)による。
 2) 年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代は $\delta^{13}\text{C}$ の値を基に同位体効果による年代誤差を補正した値。
 3) 放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科 図版10 2a-2c

環孔材で、孔圈部は2～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

・イネ科タケ亜科 (*Gramineae subfam. Bambusoideae*)

試料は円柱状で、内部は中空となるが、いずれも脆く、電子顕微鏡による観察はできなかった。横断面では維管束基本組織の中に散在する不齊中心柱が認められ、放射組織は認められない。タケ亜科には、タケ類とササ類があり、組織から分類することは困難であるが、試料の外観的特徴からはササ類の可能性が高い。

<種実遺体>

・不明種実 図版10 3a、3b

黒色、非対称な卵形で、やや扁平。長さ7mm、幅5mm、厚さ1.5mm程度。両面の正中線上に鈍稜があり、基部には、臍が見られる。表面には粒状突起が密布する。

5 考察

(1) 遺構の年代

年代測定を行った遺構のうち、SK76（試料番号2）は出土した土器から縄文時代中期、SN81（試料番号5）は土錐や流動溝の出土から古代と考えられている。その他の土坑については、出土遺物が無いため、時期は不明である。

時期不明とされた土坑（試料番号1, 3, 4）の年代測定値は5670～5700BP（補正年代5790～5830BP）であり、未補正值で30年、補正值で40年の間に集中する。このことから、SKT19, 84, 97については、ほぼ同時期に構築・使用されていたことが推定される。東北地方北部で行われた縄文時代の放射性炭素年代測定結果では、早期で7180～6570BP、前期で5840～4030BPの値（いずれも未補正值）が得られている（キーリ・武藤、1982）。これらの事例と比較すると、今回の測定値は、縄文時代早期後半～前期前半頃の値を示している。しかし、測定事例が少ないため、今後さらに測定値を増やして各時期の年代幅を明らかにした上で比較・検討が必要である。

試料番号2の年代測定値は、3780BP（補正年代3770BP）であった。いまのところ東北南部では、縄文時代中期の年代測定事例は少ないが、前期では、5840～4030BP、後期では3960～3600BPの値が得られている（キーリ・武藤、1982）。これらの事例と比較すると、SK76の測定値は縄文時代中期～後期前半頃を示しており、調査所見とも矛盾しない。

試料番号5の年代測定値は、960BP（補正年代960BP）であった。補正年代について、INTCAL98の曆年較正曲線（Stuiver et al, 1998）を用いて曆年を算出した。その結果、中央値（960BP）は、西暦1035年に交点が見られ、誤差範囲では+30BP（990BP）の場合には西暦1025年までの範囲になる。一方、-30BP（930BP）の場合には、西暦1045, 1090, 1120, 1140, 1155年に交点が見られる。この結果から、遺構の構築時期として、西暦1035年を中心に、西暦1025年～1155年頃の期間が推定される。この結果は、遺構内から古代の遺物が出土していることとも調和的である。

（2）木材利用について

炭化材が出土した遺構は、時期不明の土坑（試料番号1, 3, 4）、縄文時代中期と考えられる土坑（試料番号2）、古代の遺物が出土した遺構（試料番号5）に大別される。このうち、時期不明の土坑は、他にも同じような形態の土坑（SK01, 02, 25）が、ある程度の間隔をおいて点在しており、陥し穴の可能性が指摘されている。今回の年代測定の結果では、縄文時代早期後半～前期前半頃の年代値が得られ、短い期間に年代値が集中することから、ほぼ同時期に構築されたと考えられている。出土した炭化材は全てタケ亜科であり、外観的特徴からササ類と考えられる。種類が同一である結果は、土坑の使用目的が同じと考えられていることとも調和的であり、意図的にタケ亜科が選択・使用されたことが推定される。タケ亜科の出土状況を見ると、いずれも複数の稈が集合した状態であり、土坑底面よりもやや上層から出土している。また、全て炭化していることから、何らかの理由により火を受けたことが推定される。タケ亜科の材質や遺構の推定用途等を考慮すると、陥し穴を隠す際に利用した可能性などがある。しかし、全ての試料が炭化していることを考慮すると、タケ亜科が火を受けた後に土坑内に堆積した可能性もある。

黒ボク土の発達過程に関する研究では、人間による火入れ等の植生干渉により草原植生が維持された可能性が指摘されている（細野ほか、1992）。本遺跡周辺が狩猟場であったと考えられることから、草原を維持するための火入れ等により炭化したササ類が土坑内に混入した可能性も想定される。今後、土坑形成期前後の植物珪酸体分析等も行い、植生変遷も含めた検討を行いたい。

縄文時代中期と考えられる土坑（SK76）から出土した炭化材は、落葉広葉樹のクリであった。SK76の形態は、試料番号1, 3, 4 が出土した陥し穴と考えられる土坑とは、明らかに異なっている。このことから、炭化材の用途も異なっていると考えられるが、用途の詳細は不明である。クリは、重硬で強度や耐朽性に優れた材質を有している（平井、1980）。秋田県内では、狐森遺跡等で縄文時代の住居跡や土坑等から出土した炭化材にクリが確認されている。また、青森県の調査事例では、縄文時代の住居構築材や燃料材と考えられる炭化材にクリが多数認められている（鳴倉、1979, 1982, 1985；パリノ・サーヴェイ株式会社、2001a）。これらの結果から、クリが住居構築材や燃料材などに多く利用されていたことが推定される。本遺跡でも同様に利用されていた可能性があるが、現時点では詳細は不明である。また青森県三内丸山遺跡の調査事例では、花粉分析やDNA分析の結果からクリが管理・栽培されていた可能性も指摘されている（辻、1997；山中ほか、1999）。しかし、本遺跡周辺の

クリ栽培の有無については不明である。今後さらに資料を蓄積したい。

古代の遺物を伴う遺構（S N81）から出土した炭化材（試料番号5）は、落葉広葉樹のトネリコ属であった。遺構内からは、古代の遺物として土錐や流動滓が出土していることから、製鉄などに伴う炭化材の可能性もあるが、用途などの詳細は不明である。トネリコ属は、種類によって性質が異なるが、一般的に中庸～やや重硬で韌性があり、加工は容易で建築・器具・家具・旋作・薪炭材等に利用される（平井，1979）。このことから、トネリコ属の強度等を考慮した可能性がある。秋田県内や青森県内の調査例では、古代の構築材や燃料材などにはクリが比較的多く見られ、トネリコ属も点数は少ないが散見できる（パリノ・サーヴェイ株式会社，2001b, 2002；未公開資料）。これらのことから、本遺跡でも構築材や燃料材などに利用されていた可能性がある。

引用文献

- 平井信二（1979）木の事典 第3巻. かなえ書房.
- 平井信二（1980）木の事典 第4巻. かなえ書房.
- 細野 衛・佐瀬 隆・青木潔行（1992）指標テフラによる黒ボク土の生成開始時期の推定－十和田火山テフラ分布域湯ノ台地区を例にして－. 地球科学, 46(2), p. 121-132, 地学団体研究会.
- キーリ C.T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代. 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」, p. 246-275, 雄山閣.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（2001a）上野尻遺跡の自然科学分析. 「青森県埋蔵文化財調査報告書第302集 上野尻遺跡II－青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書－」, p. 145-149, 青森県教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（2001b）A区-1号・E区-1号遺構の自然科学分析. 「八重菊(1)遺跡－森田村緊急発掘調査報告書第7集－」, p. 180-186, 森田村教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（2002）八重菊農道地点の自然科学分析. 「八重菊(1)遺跡II 県営八重菊地区一般農道整備事業施工に係る緊急発掘調査報告書」, p. 193-216, 青森県西地方農林水産事務所・青森県西津軽郡森田村産業建設課・青森県西津軽郡森田村教育委員会.
- 鳩倉巳三郎（1979）青森市近野遺跡から出土した炭化材の樹種. 「青森県埋蔵文化財調査報告書第47集 近野遺跡 発掘調査報告書(IV)－青森県総合運動公園建設関係発掘調査－」, p. 321-323, 青森県教育委員会.
- 鳩倉巳三郎（1982）炭化材の樹種同定. 「青森県埋蔵文化財調査報告書第70集 馬場瀬遺跡 発掘調査報告書」, p. 284-285, 青森県教育委員会.
- 鳩倉巳三郎（1985）尻高(4)遺跡出土の炭化材について. 「青森県埋蔵文化財調査報告書第89集 尻高(2)・(3)・(4)遺跡 発掘調査報告書」, p. 235, 青森県教育委員会.
- Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24, 000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.
- 土谷信之・吉川敏之（1994）刈和野地域の地質（地域地質研究報告5万分の1地質図幅）. p. 72, 通商産業省工業技術院地質調査所.
- 辻 誠一郎（1997）三内丸山を支えた生態系. 岡田康博・NHK青森放送局編「縄文都市を掘る 三内丸山から原日本が見える」, p. 174-188, NHK出版.
- 山中慎介・岡田康博・中村郁郎・佐藤洋一郎（1999）植物遺体のDNA多型解析手法の確立による縄文時代前期三内丸山遺跡のクリ栽培の可能性. 考古学と自然科学, 38, p. 13-28.

第6章 まとめ

常野遺跡では発掘調査の結果、土坑7基、陥し穴6基、焼土遺構2基、溝跡1条、柱穴様ピット222基の計238遺構を検出した。また遺構内外から、縄文時代前期・中期・後期の土器・土製品・石器や、土師器・須恵器などの古代の遺物がごく少量ずつ出土した。これらの遺構と遺物から推定される本遺跡の性格、発掘調査の成果と課題について以下に述べる。

本遺跡の性格を最も端的に物語る遺構として6基検出した陥し穴が挙げられる。これらの陥し穴の平面形はすべて円形で、3基（SKT01・25・97）の底面には逆茂木の痕跡と思われる柱穴が確認された。これらの陥し穴は、年代測定や形状・類例から概ね縄文時代前期に構築されたものと推定される。6基中3基（SKT19・84・97）の陥し穴からは炭化材が出土しているが、この年代測定値が短い期間に集中することから、これらはほぼ同時期に構築・使用されていたことが考えられる。また他の3基（SKT01・02・25）についても、規模・形状が近似すること、6基に北東～南西方向にほぼ並列する規則性が見られることから、炭化材を出土した3基との間に大きな時間差は無いものと思われる。これらのことから調査区内は縄文時代前期において狩猟場として利用されていたことが判明した。秋田県内で確認された縄文時代の陥し穴は、その多くが溝状を呈し、円形陥し穴の確認例は少ない。本遺跡の調査結果は、雄物川流域における縄文期の狩猟形態を考える上で貴重な資料になると思われる。

遺物については、縄文時代前期・中期・後期の土器がごく少量ずつ出土していること、前期・中期において大木式・円筒式土器が出土していることが注目される。大木式・円筒式土器の出土は本遺跡が両文化圏の境界に位置し、交流の舞台となっていたことを物語る。またごく少量ずつではあるが、前期・中期のほか後期の土器も出土したことは、調査区周辺において連綿と人々の生活が営まれ続けたことを窺わせる。同時に、何故少量ずつの出土にとどまったのかという点も、遺跡の本質を探る上で興味深い。

縄文時代前期のある時期、遺跡が狩猟場として機能していたことを解明したことが、今回の発掘調査の最大の成果と言える。しかし、古代を含め遺構・遺物が確認されたそれぞれの時期に、調査区内がどう利用され、どのような変遷をたどったのか、土器を作った人々はどこに集落を営んでいたのか等、遺跡全体を俯瞰するまでには至らなかったため、それらの課題を問題提起するにとどめ、今後、他の類例との比較・検討から本遺跡の性格・変遷をより明確にしたい。

参考文献

- ・田村壮一 「陥し穴状遺構の形態と時期について」 『紀要』VIII (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1987 (昭和62) 年
- ・秋田県教育委員会 「大畑潜沢Ⅲ遺跡」 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書VII—北田山田ヶ沢I 遺跡・北田山田ヶ沢II 遺跡・大畑潜沢II 遺跡・大畑潜沢III 遺跡ー』 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告書第205集 1991 (平成3) 年
- ・坂本真弓・杉野森淳子 「青森県における陥し穴集成」 『研究紀要』第2号 青森県埋蔵文化財調査センター 1997 (平成9) 年
- ・二ツ井町教育委員会 『チャクシ館発掘調査報告書』 二ツ井町埋蔵文化財調査報告書第9集 2001 (平成13) 年

第7表 秋田県内陥し穴検出遺跡一覧（1）

遺構番号	遺跡名	所在地	陥し穴検出数 A型 B型 C型	文 献	備 考
1	大岱 I	小坂町	2	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』県文報第109集 1984	
2	白長根館 I	小坂町	7	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X II』県文報第120集 1984	
3	はりま館	小坂町	14	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』県文報第109集 1984	A型5基並列例1、6基並列例1
			38	県教委『はりま館遺跡発掘調査報告書』県文報第192集 1990	
4	下砂沢	鹿角市	1	鹿角市教委『下砂沢遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料40 1990	
5	大湯環状列石	鹿角市	38	鹿角市教委『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』(2)、(4)～(8)、(10)、(11)、(14)～(18)	
6	物見坂III	鹿角市	8 2	県教委『国道28号国道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』県文報第354集 2003	
7	太田谷地館跡	鹿角市	3	県教委『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V』県文報第183集 1989	第2次調査
8	高屋館跡	鹿角市	13	県教委『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI』県文報第198集 1990	
9	一ツ森館	鹿角市	1	県教委『一ツ森館遺跡発掘調査報告書』県文報197集 1990	
10	小平	鹿角市	4	鹿角市教委『小平遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料10 1979	
11	小平(2)	鹿角市	4	鹿角市教委『小平遺跡(2)』鹿角市文化財調査資料60 1997	
12	小平(3)	鹿角市	1	鹿角市教委『小平遺跡(3)』鹿角市文化財調査資料65 1999	
13	高市向館跡	鹿角市	2	鹿角市教委『高市向館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料22 1982	
14	地羅野館	鹿角市	1	鹿角市教委『地羅野遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料47 1993	
15	柴内館跡	鹿角市	15 1	県教委『主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』県文報第355集 2003	
16	下乳牛	鹿角市	1	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X I』県文報119集 1989	
17	乳牛平	鹿角市	9 5	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII』県文報第107集 1984	
18	妻の神III	鹿角市	13	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IX』県文報第108集 1984	
19	猿ヶ平II	鹿角市	2	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI』県文報第99集 1983	
20	猿ヶ平I	鹿角市	1	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書V』県文報第91集 1982	
21	御休堂	鹿角市	2	鹿角市教委『御休堂遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料19 1981	底面ピット内に自然石の埋め込み?有り
22	花輪古館	鹿角市	1	鹿角市教委『花輪古館遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料51 1994	
23	案内VI	鹿角市	1	県教委『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書』県文報第115集 1984	
24	中の崎	鹿角市	1	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII』県文報第105集 1982	
25	柏木森	鹿角市	1	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII』県文報第105集 1982	
26	北の林II	鹿角市	21	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IV』県文報第90集 1982	
27	北の林I	鹿角市	16	県教委『東北縦貫自動車道発掘調査報告書III』県文報第89集 1982	
28	荻峠	大館市	2	県教委『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』県文報第84集 1981	
29	鷲ヶ根森IV	大館市	1	県教委『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』県文報第84集 1981	
30	上聖	大館市	1	県教委『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I』県文報第219集 1992	
31	池内	大館市	22	県教委『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VII』県文報第268集 1997	縄文前期中葉例2、前期例2、逆茂木痕跡例1
32	上野	大館市	1	県教委『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI』県文報第222集 1992	
33	根下戸II	大館市	2	県教委『大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書III』県文報第330集 2001	
34	根下戸III	大館市	2	県教委『大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書III』県文報第330集 2001	
35	根下戸道下	大館市	5	県教委『大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書II』県文報第297集 2000	縄文前期
36	積迦内中台I	大館市	5	2000・2001年調査	
37	狼穴IV	大館市	2	2002年調査	
38	藤株	鷲巣町	2	県教委『藤株遺跡発掘調査報告書』県文報第85集 1981	
39	からむし岱I	鷲巣町	2	県教委『大館能代空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』県文報第339集 2002	
40	伊勢堂岱	鷲巣町	10 2	県教委『県道木戸石鷲巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II』県文報第199集 1999	
41	諫訪岱II	森吉町	1	鷲巣町教委『伊勢堂岱遺跡詳細分布調査報告書(2)』鷲巣町埋蔵文化財調査報告書第5集 1999	
42	長野II	森吉町	1	県教委『国道105号国道路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』県文報第353集 2003	
43	上ノ野	二ツ井町	5	二ツ井町教委『上ノ野遺跡発掘調査報告書』 二ツ井町埋蔵文化財調査報告書第8集 1998	C型4基並列、縄文中期前葉～晚期前葉
44	竜毛沢館跡	二ツ井町	3	県教委『竜毛沢館跡発掘調査報告書』県文報第188集 1990	縄文後期前半の堅穴住居跡を切る例2
45	チャクシ館跡	二ツ井町	4	二ツ井町教委『チャクシ館跡発掘調査報告書』二ツ井町埋蔵文化財調査報告書第9集 2001	
46	土井	八森町	2	県教委『土井遺跡発掘調査報告書』県文報第111集 1984	
47	中田面	峰浜村	5	県教委『中田面遺跡・重兵衛I・II遺跡・根洗場遺跡発掘調査報告書』県文報第74集 1980	
48	竹生	能代市	1	県教委『杉沢台・竹生遺跡発掘調査報告書』県文報第83集 1981	
49	館下I	能代市	1	県教委『館下I遺跡発掘調査報告書』県文報第62集 1979	
50	金山館	能代市	1	能代市教委『金山館発掘調査報告書』 1986	
51	腹鞍の沢	能代市	10	県教委『腹鞍の沢遺跡発掘調査報告書』県文報第97集 1982	
52	梯ノ台	能代市	12	能代市教委『梯ノ台遺跡緊急発掘調査(第一次)記録』 1994	
53	蟻ノ台I	能代市	1	県教委『能代・山本地区広域農道関係遺跡発掘調査報告書』県文報第45集 1977	
54	上の山II	能代市	2	県教委『上の山II遺跡第2次発掘調査報告書』県文報第137集 1986	
55	ムサ岱	能代市	5	2002年調査	
56	寒川I	能代市	1	2002年調査	
57	十二林	能代市	4	県教委『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I』県文報第167集 1988	
58	石丁	能代市	8	県教委『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II』県文報第178集 1989	
59	福田	能代市	2	県教委『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II』県文報第178集 1989	
60	鴨子台	八竜町	5 1	県教委『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III』県文報第230集 1992	
61	八幡台	八竜町	2	県教委『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III』県文報第230集 1992	
62	館の上	八竜町	2 1	県教委『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV』県文報第298集 2000	
63	扇田谷地	八竜町	1	県教委『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V』県文報第283集 1999	
64	盤若台	琴丘町	1 2	県教委『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI』県文報第319集 2001	

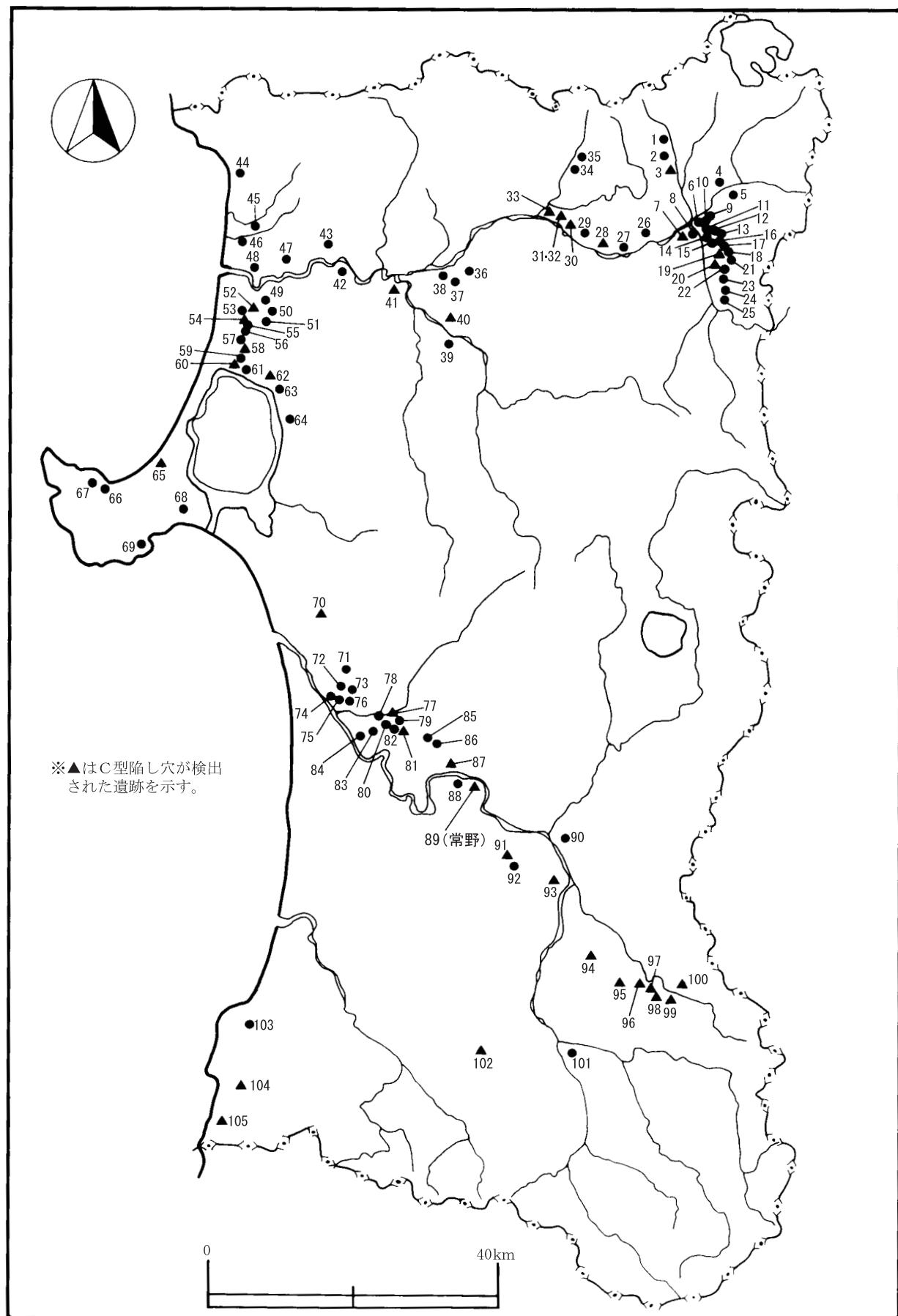
第8表 秋田県内陥し穴検出遺跡一覧（2）

遺構番号	遺跡名	所在地	陥し穴検出数			文 献	備 考
			A型	B型	C型		
63	兵ヶ沢	琴丘町	1			県教委『日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II』県文報第296集 2000	縄文前期
64	小林I	琴丘町	1	1		県教委『日本海沿岸東北自動車道建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV 縄文時代編』県文報第344集 2002	
65	三十刈I	男鹿市	2		2	県教委『三十刈I・II 遺跡発掘調査報告書』県文報第110集 1984	
66	中野	男鹿市	1			県教委『主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』県文報第312集 2001	
67	泉野冷水	男鹿市	1			県教委『主要地方道入道崎寒風山線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』県文報第312集 2001	
68	脇本石館	男鹿市	1			男鹿市教委『脇本石館遺跡詳細分布調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第16集 1997	
69	大烟台	男鹿市	2			日本鉱業株式会社船川製油所『大烟台遺跡発掘調査報告書』 1979	
70	片野I	秋田市	46		3	県教委『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV』県文報第265集 1996	
71	諏訪ノ沢	秋田市	2			秋田市教委『宅地造成計画に伴う緊急発掘調査報告書』 1993	
72	下堤C	秋田市	1			秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1987	
73	下堤D	秋田市	4			秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1982	
74	地蔵田A	秋田市	1			秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1994	
75	秋大農場南	秋田市	1			秋田市教委『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1992	
76	湯ノ沢F	秋田市	1			秋田市教委『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1984	
77	風無台I	河辺町		1		県教委『七曲台遺跡群発掘調査報告書』県文報第125集 1985	
78	松木台III	河辺町	15			県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書I』県文報第150集 1986	
			14			県教委『日本海沿岸東北自動車道建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IX』県文報第326集 2001	
79	石坂台I	河辺町	1			県教委『七曲台遺跡群発掘調査報告書』県文報第125集 1985	
80	石坂台III	河辺町	1			県教委『七曲台遺跡群発掘調査報告書』県文報第125集 1985	
81	石坂台IV	河辺町	1	3		県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書I』県文報第150集 1986	
82	石坂台VIII	河辺町	1			県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書I』県文報第150集 1986	
83	岱I	河辺町	1			県教委『日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V』県文報第314集 2001	
84	奥椿岱	雄和町	2			県教委『秋田空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』県文報第305集 2000	
85	上ノ山II	協和町	6			県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II』県文報第166集 1988	縄文前期後半の 堅穴住居跡を切 る例1
86	館野	協和町	1			県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II』県文報第166集 1988	
87	半仙	協和町	3	5		県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書III』県文報第180集 1989	
88	上野台C	西仙北町	1			県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書III』県文報第180集 1989	
89	常野	西仙北町		6	本書		縄文前・中・後期
90	払田柵跡	仙北町	16			県教委『払田柵跡』県文報113・139・185・225・250・258集 扟田柵調査事務所年報1983・1985・1988・1991・1993・1994	
91	大畑潜沢III	南外村	2	1		県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書VII』県文報第205集 1991	A型2基並列1 (縄文中期末葉)
92	石神	大曲市	6			県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書VI』県文報第191集 1990	A型2基並列1
93	下田	大森町		2		県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書IV』県文報第189集 1990	土坑への転用例1
94	オホン清水	横手市	2	4		横手市教委『オホン清水～第3次遺跡発掘調査報告書～』 1984	
95	富ヶ沢A窓跡	横手市		19		県教委『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』県文報第220集 1992	逆茂木残存例1 (SK24)
96	小田V	山内村	10	4		県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXI』県文報第262集 1996	A・C型各2基 にグループ化、 2基同時設置
97	小田IV	山内村	3	3		県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書VIII』県文報第243集 1994	
98	虫内II	山内村		1		県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIV』県文報第234集 1993	
99	岩瀬	山内村		6		県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXII』県文報第263集 1996	
100	上谷地	山内村	1	1		県教委『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVI』県文報第241集 1994	
101	宮の前	稻川町	1			県教委『宮の前遺跡発掘調査報告書』県文報第64集 1979	
102	高橋山II	羽後町		2		羽後町教委『町内遺跡発掘調査概報』 1987	
103	下岩ノ沢	仁賀保町	1			仁賀保町教委『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書』 1986	
104	御嶽公園跡	象潟町		6		県教委『緊急地方道路整備事業象潟矢島線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』県文報第311集 2001	
105	ヲフキ	象潟町		1		県教委『大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I』県文報第199集 1990	土坑への転用例1

註

※上記第7・8表は、参考文献中の「大畑潜沢III遺跡」「青森県における陥し穴集成」「チャクシ館発掘調査報告書」中の「陥し穴検出遺跡一覧」を基とし、近年の事例を付加してまとめたものである。

※表中のA型・B型・C型は、田村壯一氏による形状による分類を示す。A型は溝状、B型は楕円形、C型は円形を示す。

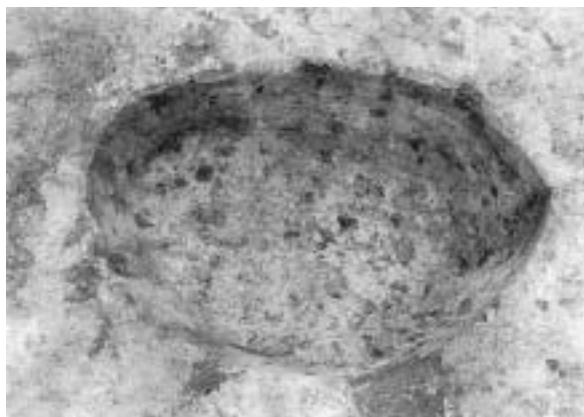


第16図 秋田県内陥し穴検出遺跡分布図



調査区全景（東→）

→ 断面図



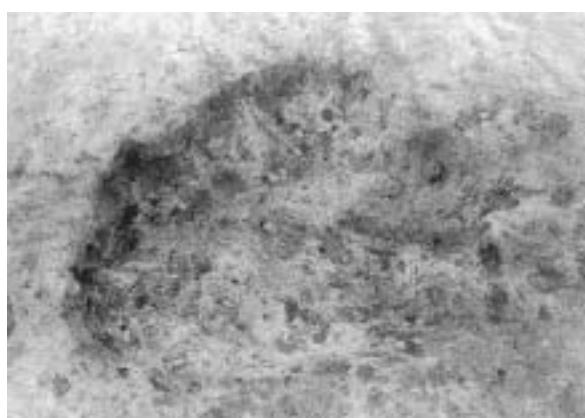
1 SK 37土坑完掘 (南西→)



2 SK 53土坑・SK P49・50・70柱穴様ピット完掘 (北→)



3 SK 55土坑完掘 (南→)



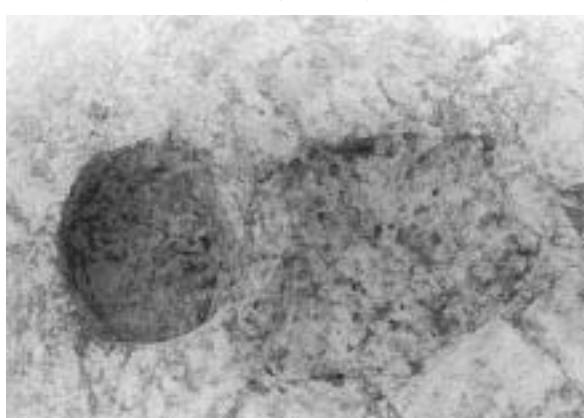
4 SK 56土坑完掘 (南西→)



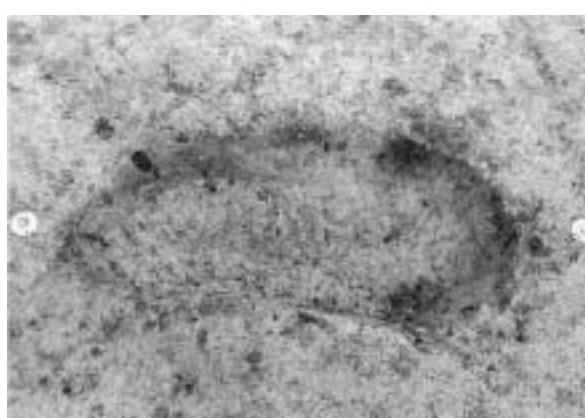
5 SK 76土坑断面 (南西→)



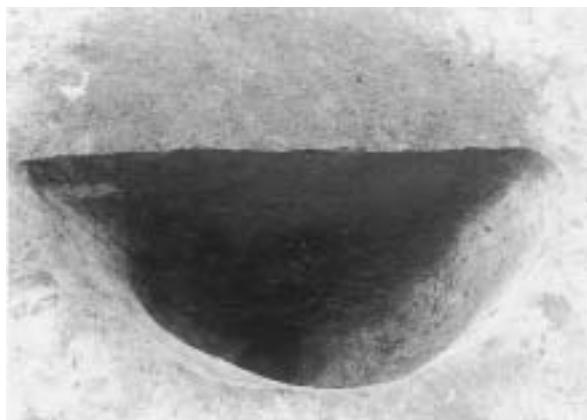
6 SK 76土坑出土状況 (南→)



7 SK 110土坑・SK P111柱穴様ピット完掘 (南東→)



8 SK 204土坑完掘 (西→)



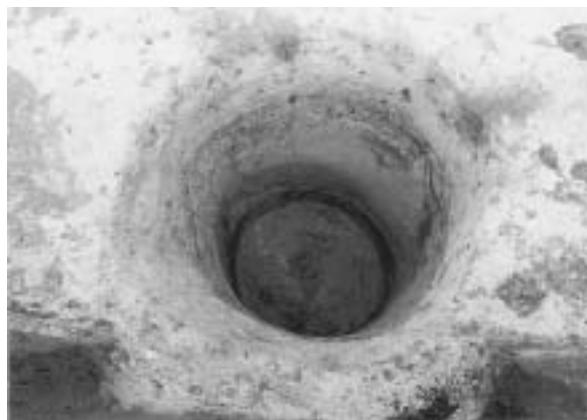
1 SKT 01陥し穴断面 (南→)



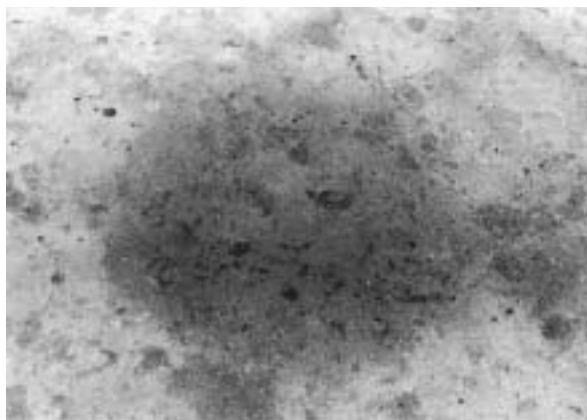
2 SKT 01陥し穴完掘 (南→)



3 SKT 02陥し穴断面 (北西→)



4 SKT 02陥し穴完掘 (南→)



5 SKT 19陥し穴確認状況 (南→)



6 SKT 19陥し穴断面 (南→)



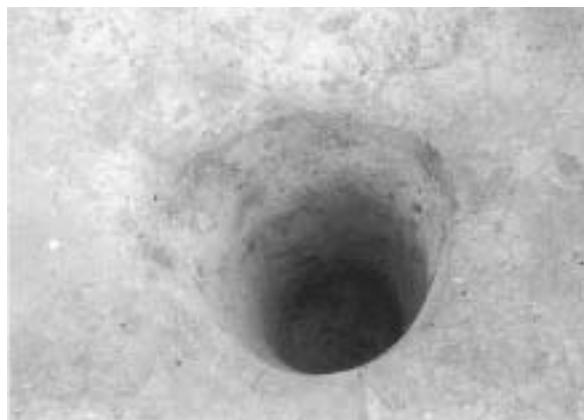
7 SKT 25陥し穴断面 (西→)



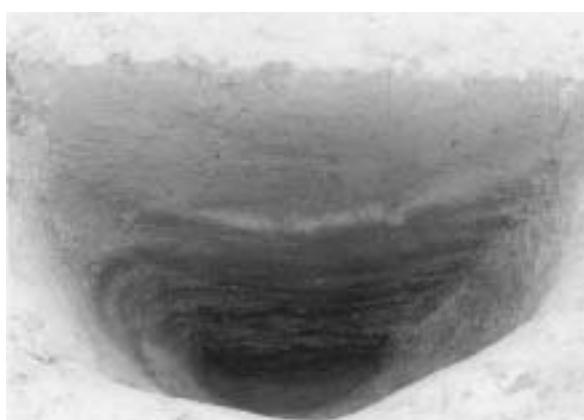
8 SKT 25陥し穴完掘 (西→)



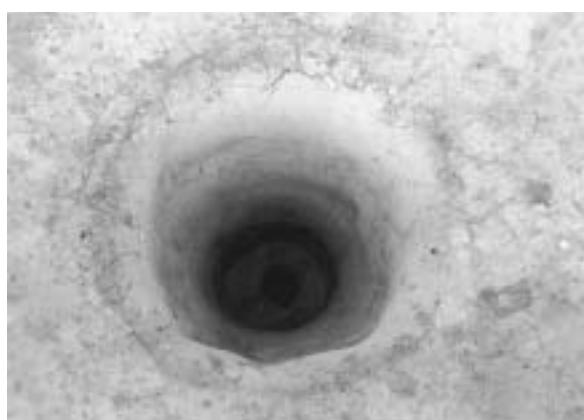
1 SKT 84陥し穴断面 (南西→)



2 SKT 84陥し穴完掘 (西→)



3 SKT 97陥し穴断面 (西→)



4 SKT 97陥し穴完掘 (西→)



5 SN 15焼土遺構完掘 (南→)



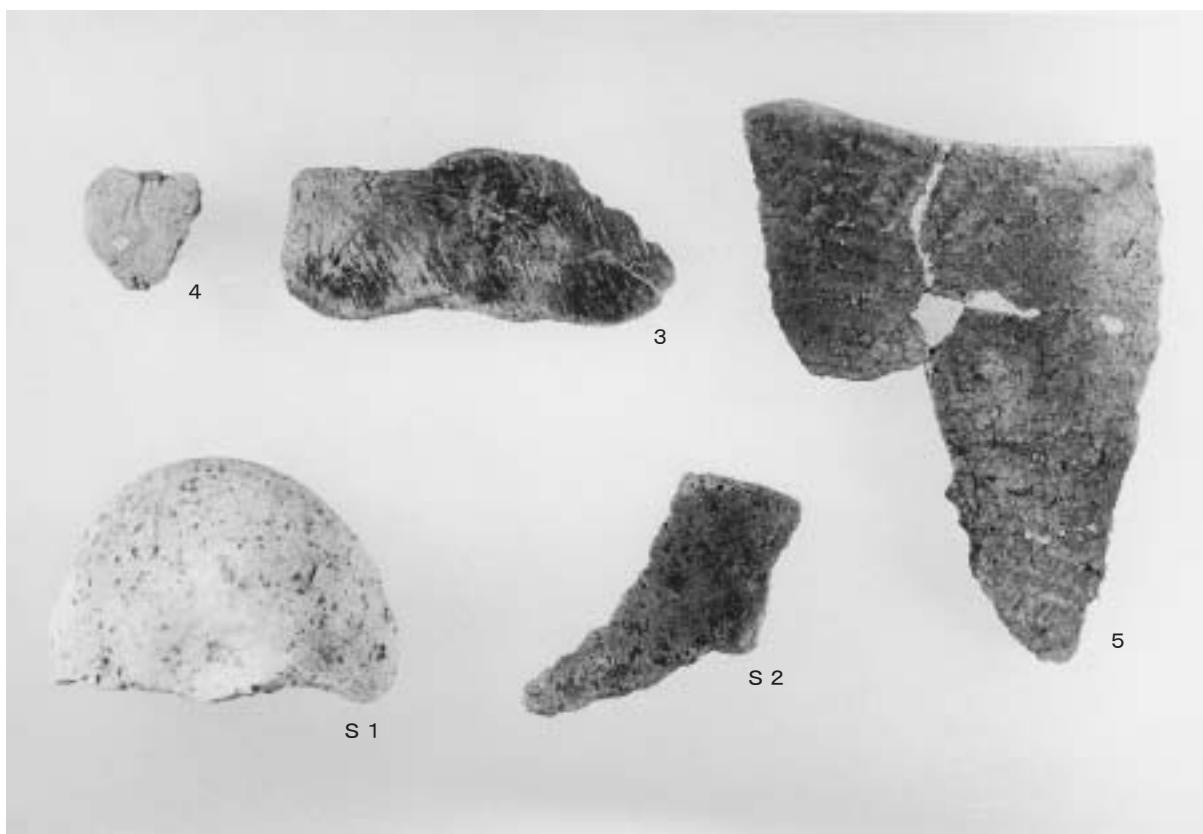
6 SN 81焼土遺構遺物出土状況 (南→)



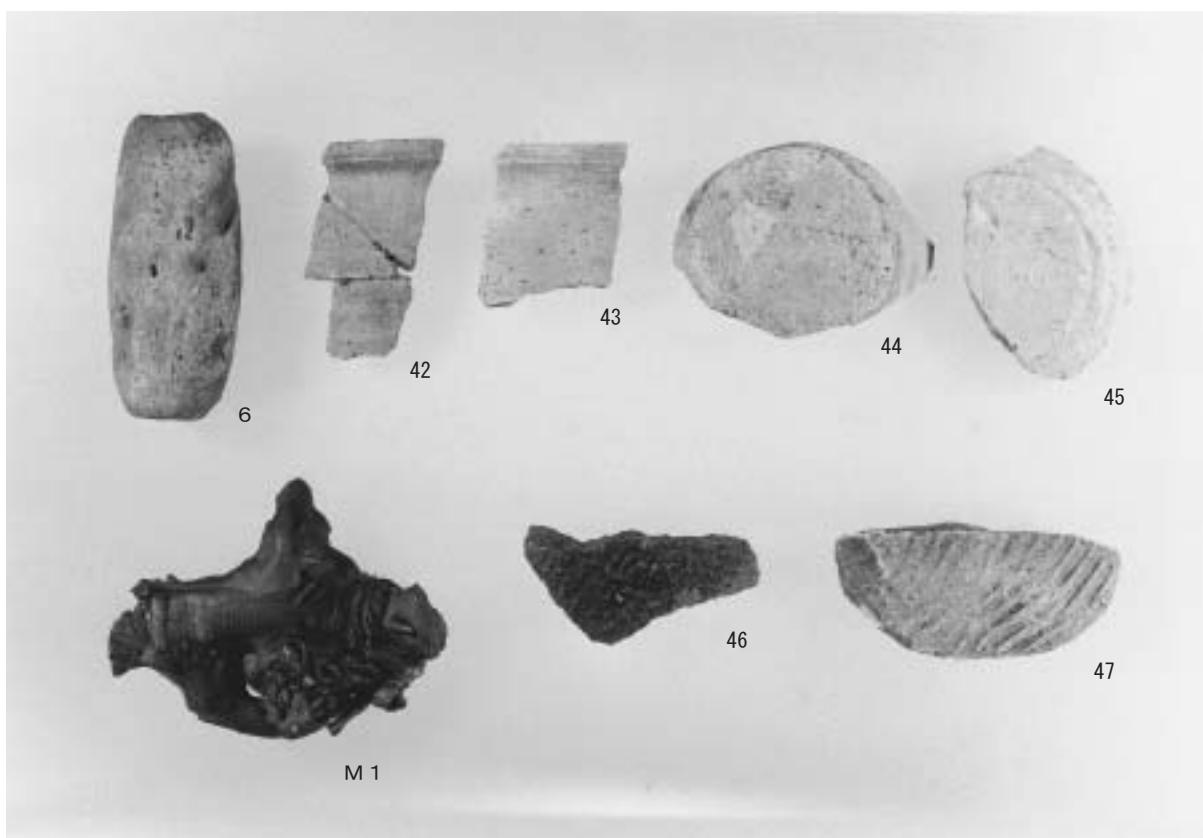
7 SD 03溝跡完掘 (北東→)



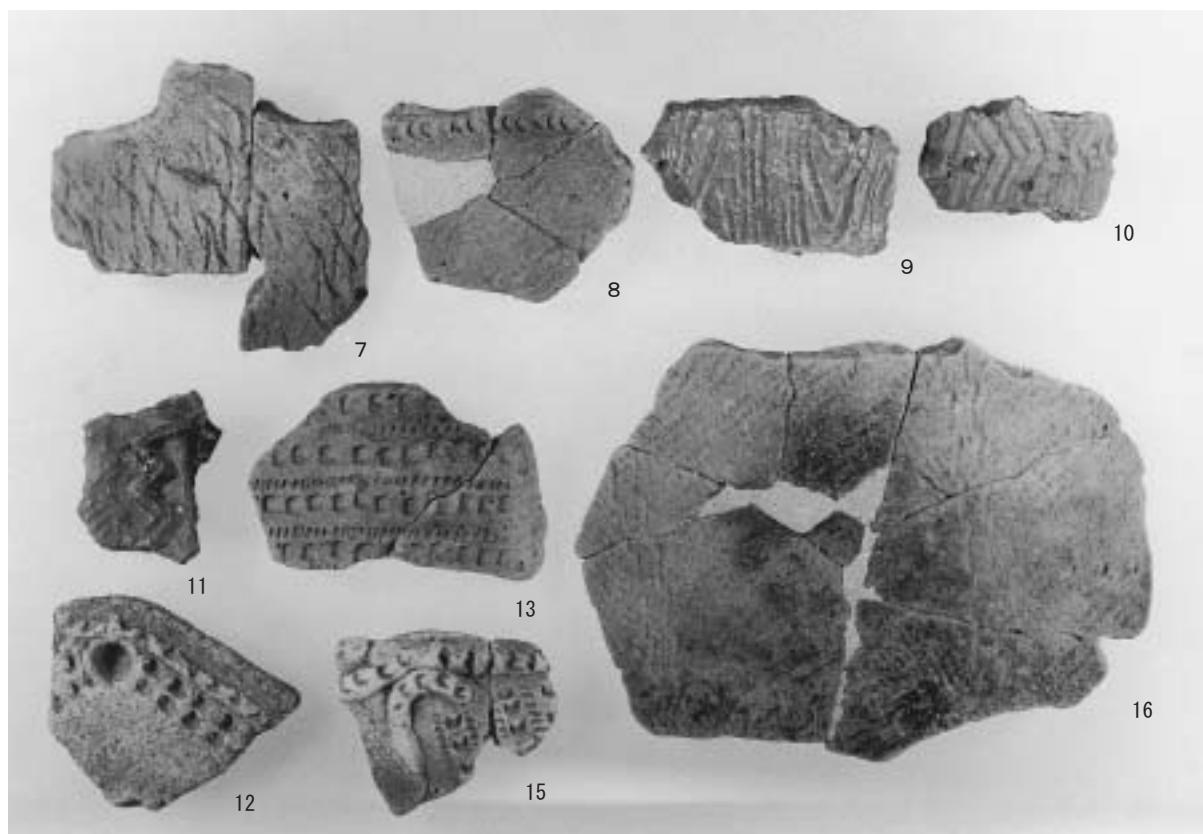
8 小学生による遺跡見学 (北東→)



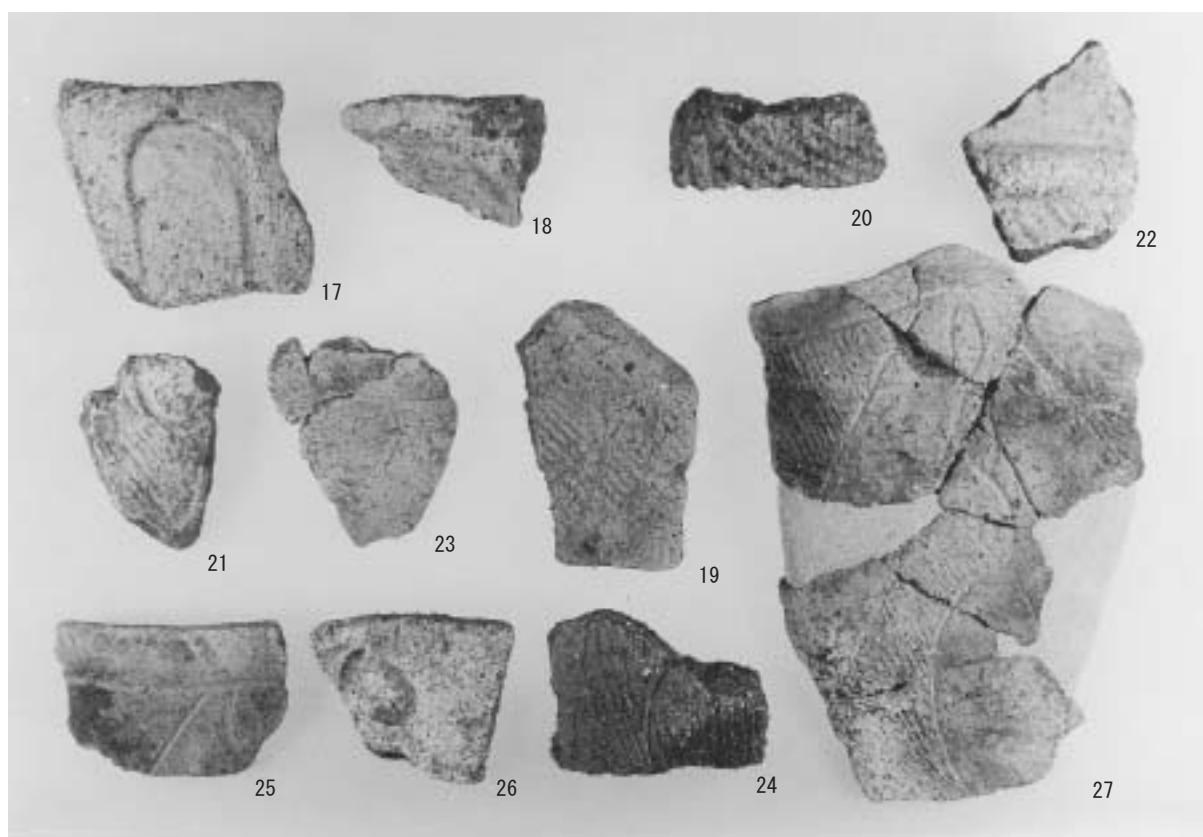
1 遺構内出土土器・石器



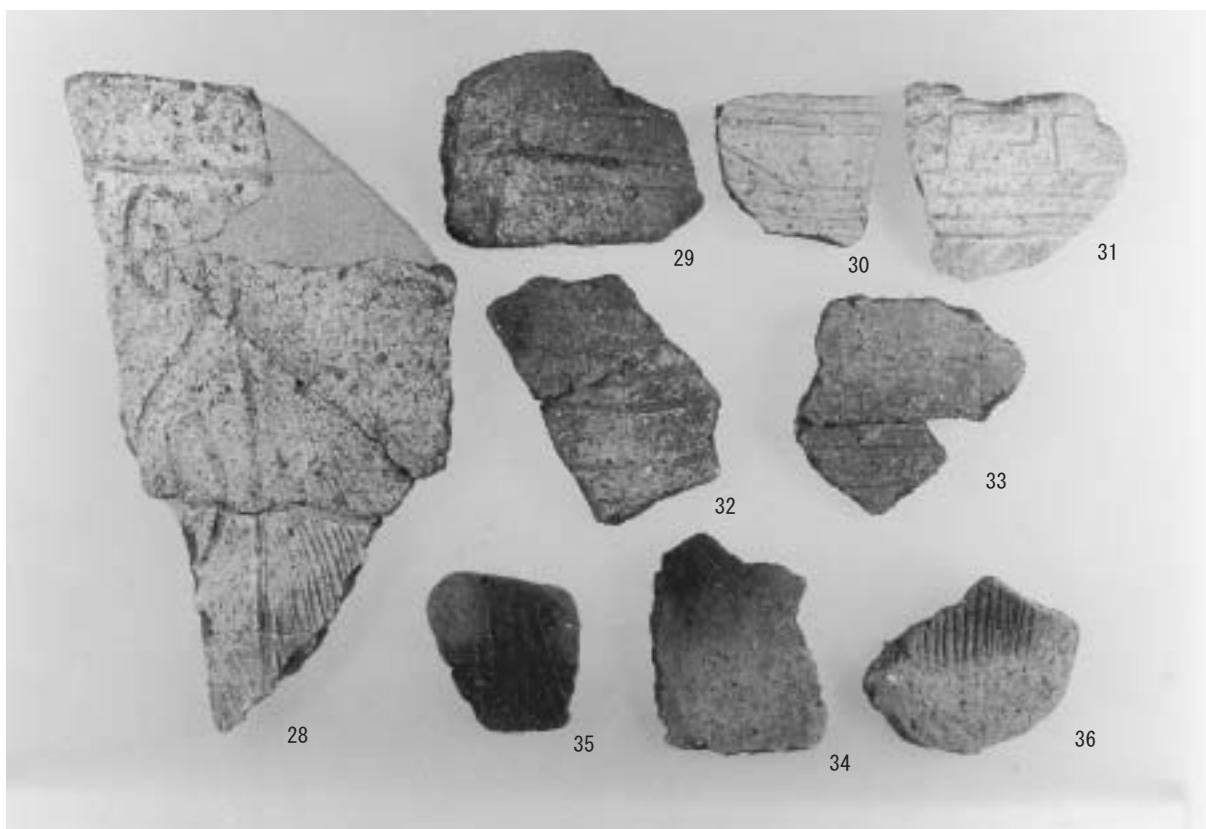
2 遺構内外出土土器・須恵器・土錘・鉄滓



1 遺構外出土土器 (1)



2 遺構外出土土器 (2)



1 遺構外出土土器（3）



2 SK76土坑埋土中出土土器胴部



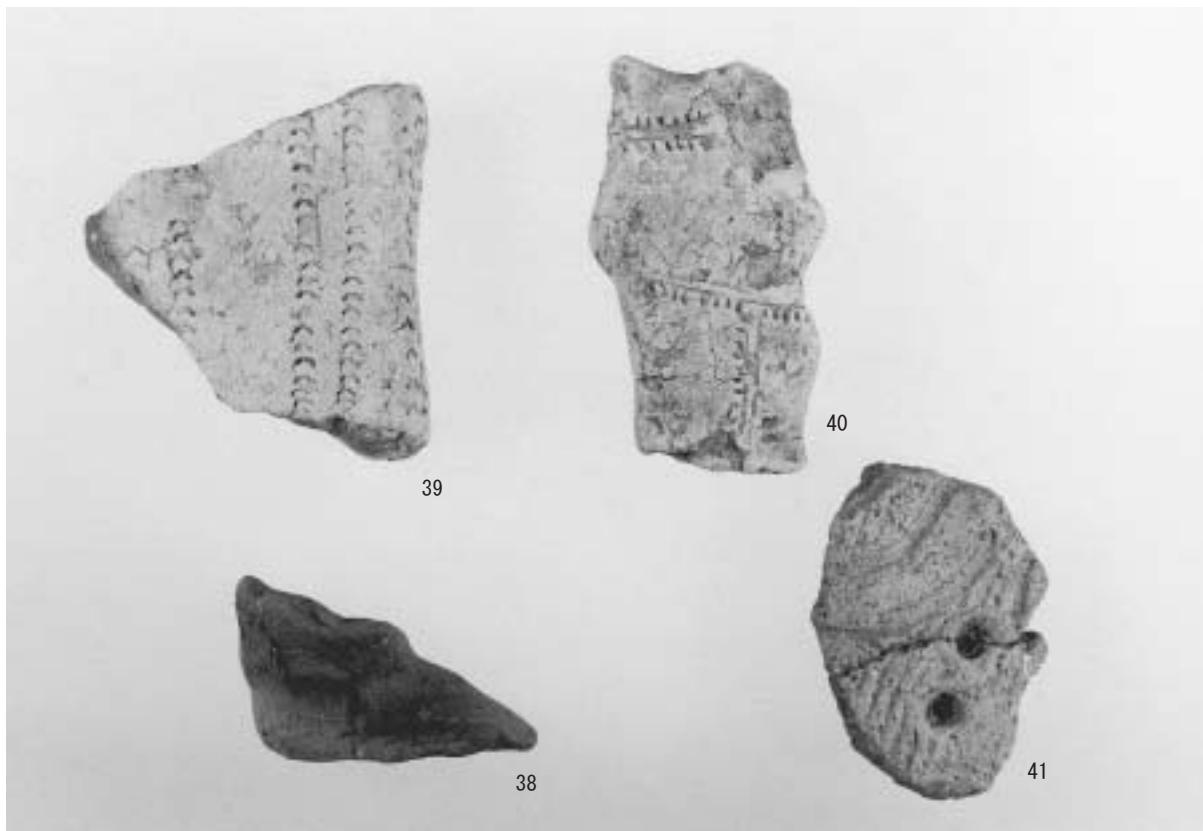
3 SK76土坑埋土中出土土器底部



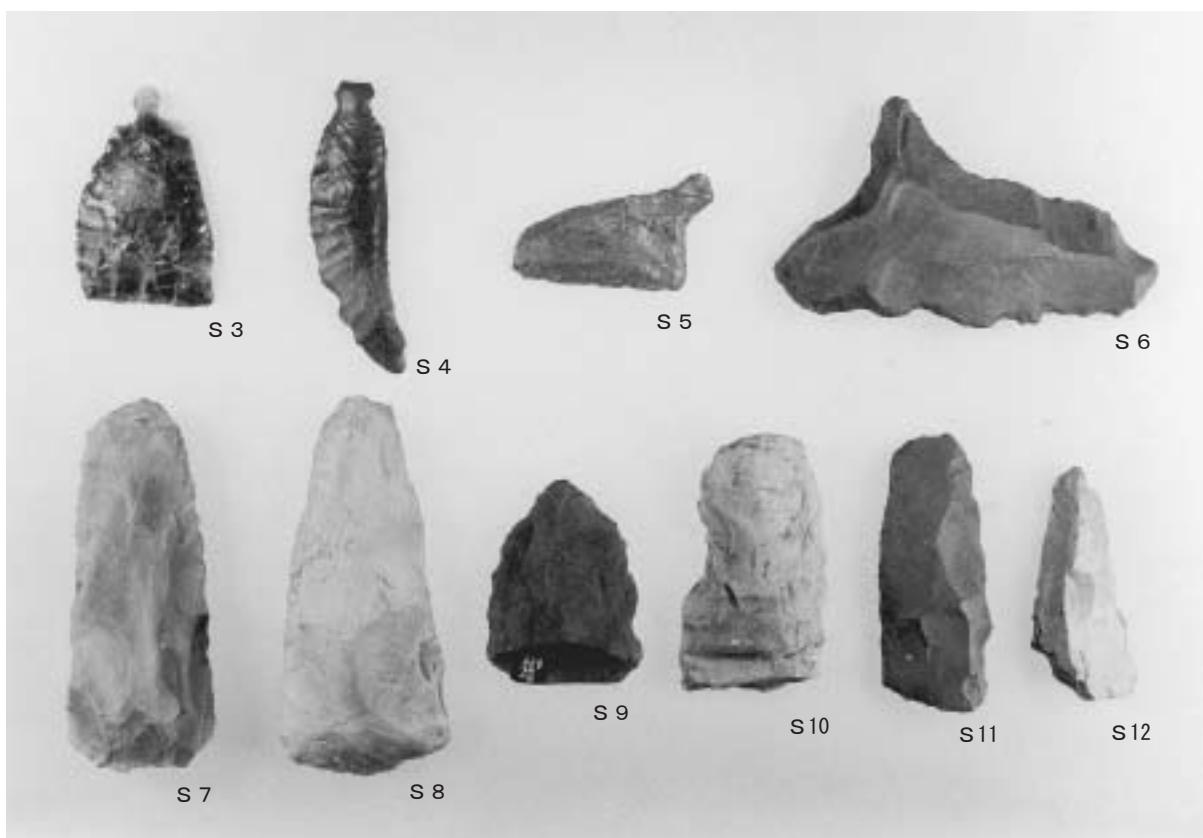
4 ME46グリッド出土土器



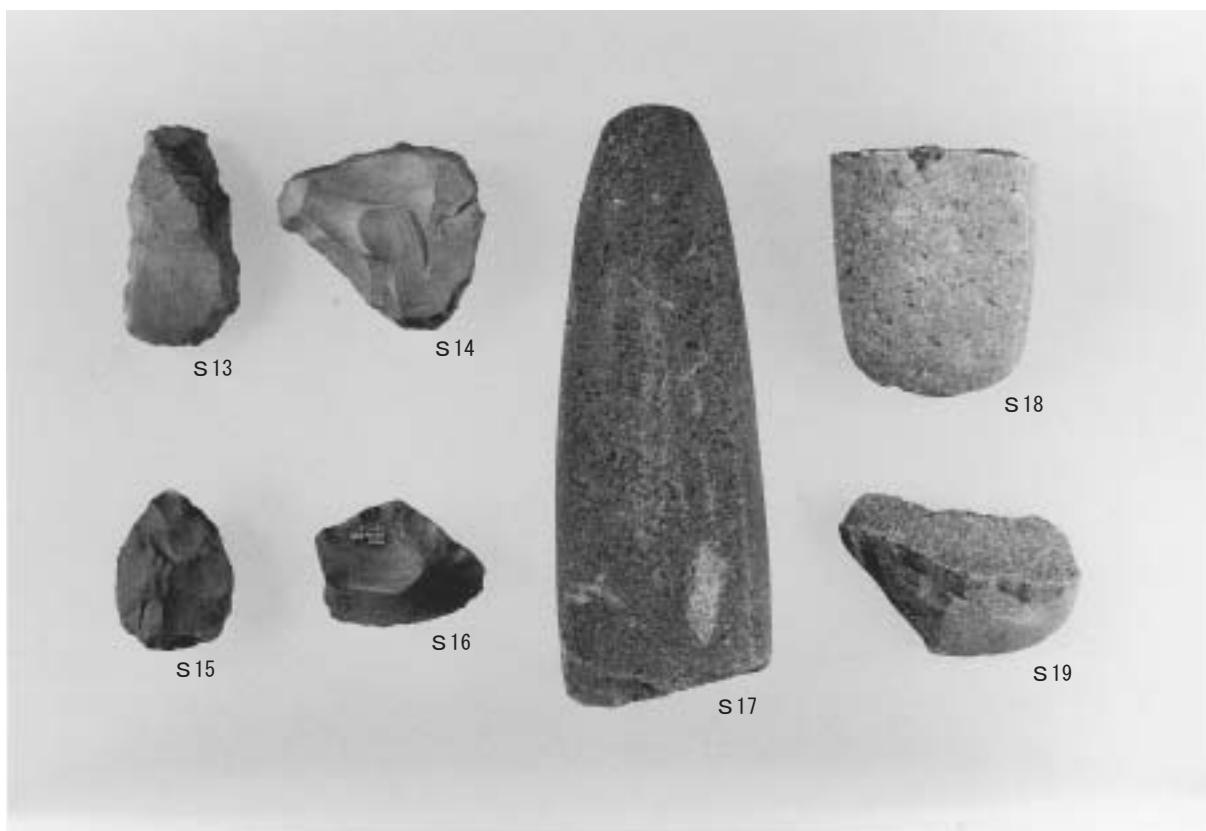
5 MO37グリッド出土土器



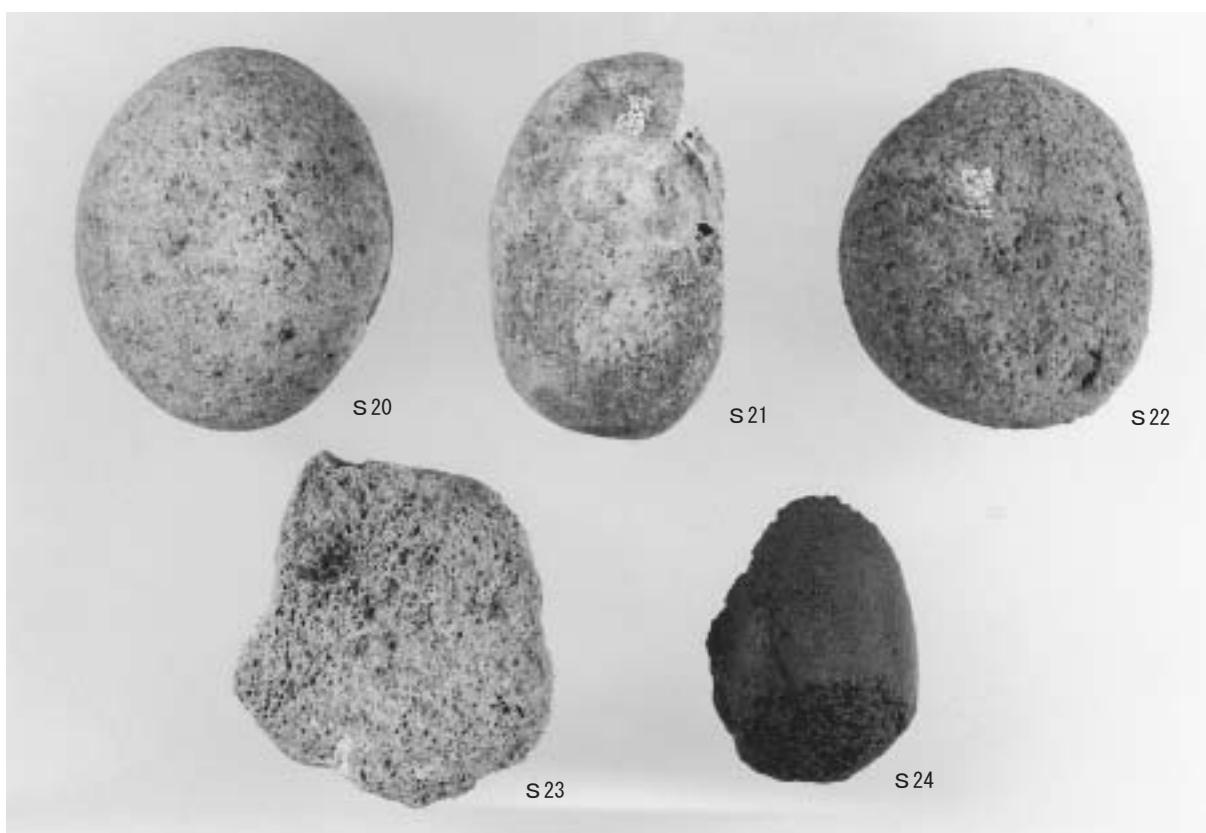
1 遺構外出土土製品



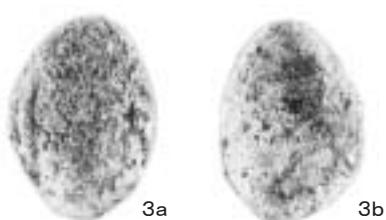
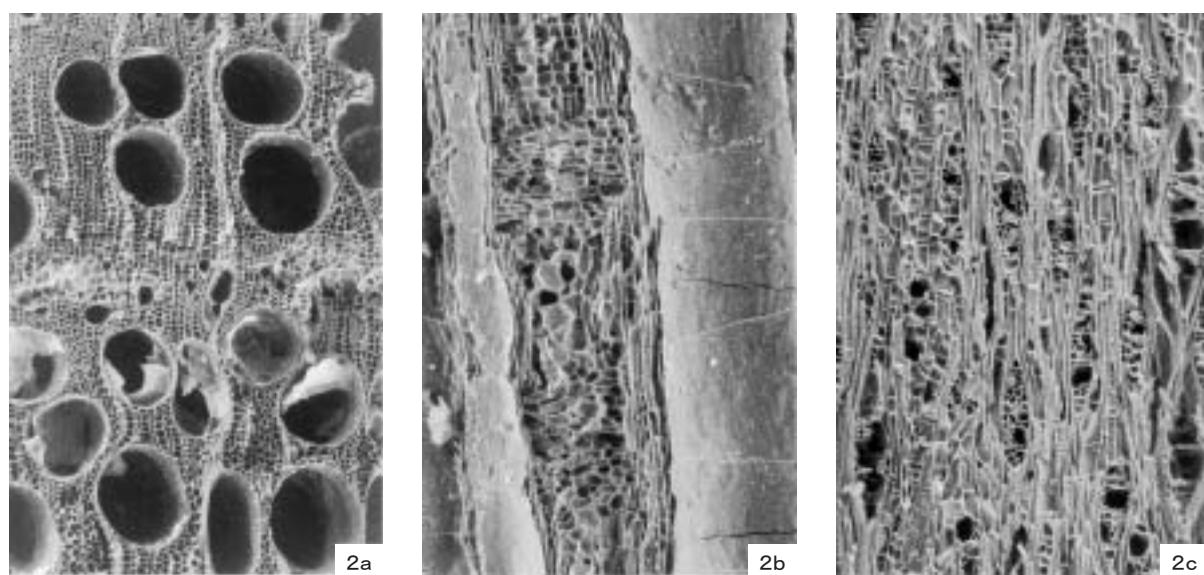
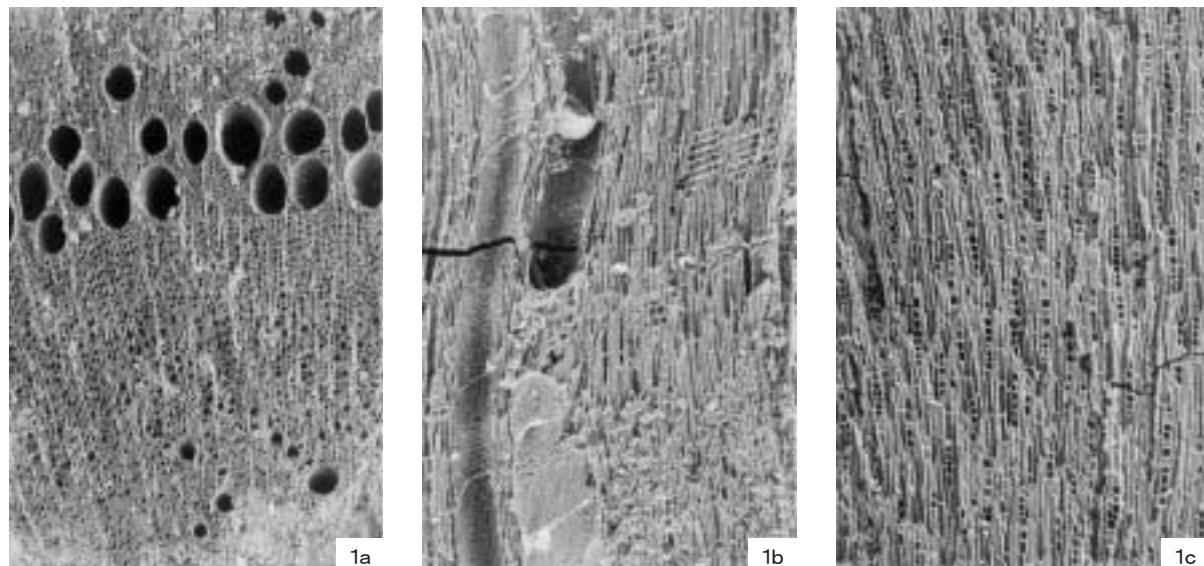
2 遺構外出土石器（1）



1 遺構外出土石器（2）



2 遺構外出土石器（3）



1. トネリコ属 (試料番号5) a : 木口, b : 柄目, c : 板目
2. クリ (試料番号2) a : 木口, b : 柄目, c : 板目
3. 不明種実 (試料番号4)

■ 200 μ m:1-2a
■ 200 μ m:1-2b, 1-2c
■ 5mm:3

炭化材樹種顕微鏡写真

報 告 書 抄 錄

ふりがな	じょうのいせき							
書名	常野遺跡							
副書名	主要地方道本荘西仙北角館線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第368集							
編著者名	鈴木 茂・横山香菜子・田村瑞保・小西秀平							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20 TEL 0187-69-3331							
発行年月日	西暦2004年1月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
じょうのいせき 常野遺跡	あき た けんせんぼくぐん 秋田県仙北郡 にせんぼくまちてらだて 西仙北町寺館 あざじょうの 字常野20外	市町村 05422	遺跡番号 —	北緯 39° 32' 41"	東経 140° 20' 57"	調査期間 20020819 20021016	2,315 m ²	主要地方道 本荘西仙北 角館線緊急 地方道路整 備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
常野遺跡	狩猟場	縄文時代 古代	土坑 陥し穴 焼土遺構 溝跡 柱穴様ピット	7基 6基 2基 1条 222基	縄文土器・石器 石器 土師器・土錐 鉄滓	縄文時代前期の陥し 穴が検出され、縄文 時代に狩猟場として 利用されていたこと が判明した。		
			計 238遺構					

秋田県文化財調査報告書第368集

常野遺跡

—主要地方道本荘西仙北角館線緊急地方道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行 平成16年1月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802

秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

TEL0187-69-3331 FAX0187-69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号

TEL018-850-5193

印 刷 高橋活版印刷(有)

